



東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

目次

アジア・アフリカ言語文化研究所創立50周年に寄せられた祝辞	2
アジア・アフリカ言語文化研究所のあゆみ	4
50周年を迎えて	6
「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」	
言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2:LingDy2	7
言語研修	8
海外研究拠点	10
概要	
AA研の研究活動	12
研究・運営体制	13
研究組織構成	17
スタッフ	19
共同研究	
基幹研究	24
共同利用・共同研究課題	26
研究連携ネットワーク	36
既形成拠点	38
研究資源	
アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源	40
出版物	40
文献資料コレクション	41
音声学実験室	42
研究者養成	
フィールド言語学ワークショップ	44
中東・イスラーム関連セミナー	45
アクセスマップ	47

CONTENTS

Messages Concerning the Fiftieth Anniversary of ILCAA	2
Academic Chronology of Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa	4
Message from the Director	6
Linguistic Dynamics Science Project 2 (LingDy2)	7
Intensive Language Courses	8
Overseas Research Offices	10
Overview	
Research Activities of ILCAA	12
Evaluation System of Research and Organization	13
Organization	17
Staff	19
Joint Research	
Core Research Programs	24
Joint Research Projects	26
Collaboration Networks	36
Establishd Academic Institutions	38
Research Resources	
Information Resources on Languages and Cultures of Asia and Africa	40
Publications	40
Library	41
Phonetics Laboratory	42
Training and Capacity Building	
Field Linguistics Workshops	44
Seminars on Middle East and Islamic Studies	45
Access map	48

50th

平成二六年度
創立五〇周年を迎えました

ILCAA celebrates its 50th anniversary this year

アジア・アフリカ
言語文化研究所

東京外国語大学 旧西ヶ原キャンパス AA 研看板
Sign board of the former building of ILCAA,
in Nishigahara campus, TUFS

アジア・アフリカ言語文化研究所創立50周年に寄せられた祝辞 Messages Concerning the Fiftieth Anniversary of ILCAA



AA 研は創立 50 周年を迎えることになりました。この間、所員の方々の研鑽によって 2010 年から共同利用・共同研究拠点に認定されています。このように卓越した国際的研究拠点を有することは本学にとっての誇りです。一方、アジア・アフリカの言語文化に関する共同研究を持続させ深化させるためには、次世代研究者の養成が不可欠です。AA 研は 2016 年には第二期拠点活動を迎えますが、高度な研究の推進と研究者養成のために所員の方々がさらに奮闘努力されることを願ってやみません。

東京外国語大学長 立石 博高

臨地研究を重視し、若手研究者を養成してきた、アジア経済研究所、アジア・アフリカ言語文化研究所、京都大学東南アジア研究所が相次いで 50 周年記念行事を催されていることは感無量である。その中でも AA 研が常に先導的な役割を果たしてきたことは周知の事実であり、これから新しい発展を続けられることを期待している。

人間文化研究機構長 立本 成文

AA 研創立 50 周年、おめでとうございます。日本を代表するアジア・アフリカ地域の言語、民族、歴史の研究機関として 50 年間先導的研究をやってこられたことに敬意を表するとともに、私自身その一員として約半分の期間所属できたことを大きな誇りとしています。アジア・アフリカの奥深い研究分野に地道に、また果敢に切り込んで行く AA 研のこれからの発展に期待します。

日本語学会会長 梶 茂樹 (元 AA 研所員)

創立 50 周年、おめでとうございます。附置研究所は、その研究内容や研究手法を絶えず進化させることが求められています。50 年間、それを続けてきたというのは大きな実績です。私たちも 2015 年に 50 周年を迎えます。多角的で多様な社会が共生する世界へと導くために、手を取り合って、日本国内のみならず世界をリードしていきましょう。

京都大学東南アジア研究所長 河野 泰之

半世紀にわたり日本の地域研究を牽引してこられた貴研究所の御志、御献身に敬意を表します。また、貴研究所と共に地域研究コンソーシアムの創立と運営に携わり、地域を越えた日本の地域研究全体の発展に寄与できましたことは、私どもにとりましても大きな喜びです。今後も国内外の関連機関との連携をさらに深め、世界における地域研究の発展に尽くして参りましょう。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長
家田 修

AA 研創立 50 周年おめでとうございます。全国共同利用としての長い歴史を有する AA 研に、私どもの研究所が共同利用・共同研究拠点化する際には、共同研究の仕組みなど種々学ばせていただきました。対象分野は異なりますが、同じ人文・社会学系の附置研究所として、研究資源の蓄積・公開等、共通する機能も有しておりますので、互いに連携・協力しあいながら、知の営みを展開していきたいと考えております。

東京大学史料編纂所長 久留島 典子

アジア・アフリカ言語文化研究所の創立 50 周年、まことにおめでとうございます。共同利用・共同研究拠点として、アジア・アフリカ地域の社会と文化に関する総合的研究を先導し、その第一級の成果は内外で広く認知されています。今後も、AA 研のミッション、人類の未来をみすえた多元的世界の発展可能性を追究されることを期待します。

国立民族学博物館長 須藤 健一

このたび、アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) が創立 50 周年を迎えられることをお祝い申し上げます。日本アフリカ学会も創立 50 周年を迎えています。岡正雄 AA 研初代所長は日本アフリカ学会の創立発起人のひとりでした。AA 研の皆様が日本アフリカ学会の活動を支援していただいていることに敬意を表し、地域研究においても前進することを期待しています。

日本アフリカ学会会長 (2011 年 4 月～2014 年 3 月)
川端 正久

AA 研創立 50 周年、誠にありがとうございます。貴研究所の設置以来これまでの旺盛な研究活動に対して大いなる敬意を表するとともに、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として、今後さらに充実した研究者ネットワークを国内外に構築し、当該地域のみならず広く人類の幸福実現に向けて、指導的役割を果たされますことを祈念いたします。

大阪大学大学院言語文化研究科長 我田 広之

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の創立 50 周年を、日本文化人類学会会長としてお祝い申し上げます。AA 研は過去半世紀にわたり、文化人類学において、また広く文化や言語、地域や歴史の研究において、この領域を主導し代表的研究者を輩出してこられました。今後の一層のご発展を心よりお祈り申し上げます。

日本文化人類学会会長 小泉 潤二

1990 年頃から始まった教養 (学) 部廃止、大学院重点化、法人化、大学改革実行プランなどの一連の淘汰の嵐の中で、日本の大学はそれへの対応に右往左往してきました。このような状況の中でこそ、大学共同利用機関と共同利用・共同研究拠点は我が国の人文科学の持つ基礎研究での実力を発揮し、世界の歴史と現状への新しい認識論を提示できると信じます。AA 研教員諸賢の御活躍を祈念しております。

国立民族学博物館名誉教授 長野 泰彦
(平成 25 年度 AA 研外部評価委員会委員長)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が創立 50 周年を迎えられたこと、まことにおめでとうございます。心からお祝い申し上げますと同時に、地域研究の先進研究所として、また数多くの貴重な学術データベースの整備と公開を継続されていることに、敬意を表するものであります。学術情報の共有化における私ども京都大学地域研究統合情報センターとの連携が深化することを希望いたしますとともに、貴研究所の今後のますますのご発展を祈念いたします。

京都大学地域研究統合情報センター長 原 正一郎

日本における中東研究の発展は、AA 研ぬぎには語れない。言語学、歴史学、文化人類学といった異なるディシプリン間の対話・交流の中から新たな地域研究のあり方が立ち現われる場として、また、徹底したフィールドワークに基づく斬新な理論・世界像が編み出される場として、AA 研は研究者にとって靈感の源であり続けてきた。1967 年の「イスラム化と近代化に関する調査研究」に始まるさまざまな共同研究、さらに「社会・文化変容」や「異文化接触」、「部族社会」や「都市化」をめぐって展開されてきた海外学術調査は、全く新しい視点・研究領域を提示し、日本の中東研究を飛躍的に発展させた。また、AA 研の外国人研究員として招聘された中東の研究者たちは、その後も長く続く学問的・知的交流の確かな礎を築いた。個性的で志の高い研究者が集い、思う存分研究に取り組める場として、今後も AA 研がさらなる発展を遂げることを期待したい。

日本中東学会会長 栗田 禎子

1964 年の創立以来、貴研究所はアジア・アフリカ地域という人類の過半数を擁し、多様な文化、言語を包含する地域の言語、文化研究に大きな成果をあげられ、また全国の関連研究者に対し、共同利用・共同研究拠点として実績をあげられて来られた事、また言語学、文化人類学分野のみならず、海外学術調査の総括班事業を通じ、自然科学を含む広い学際分野の研究者に対し、多大の貢献を果たされて来られたことは、特筆すべき業績であり、心からの敬意を表するとともに、今後の更なる発展を期待いたします。

総合研究大学院大学名誉教授 渡辺 興亜

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所創立 50 周年にあたり、ともにアジア地域を対象とする研究所より、心からのお祝いを申し上げます。アジアの少数言語の専門家を多く擁する AA 研の先生方には、平素見慣れぬ文字の解読でも、どれだけ貴重なご教示を賜ってきたことか。AA 研の今後ますますのご発展をお祈りいたします。

東京大学東洋文化研究所長 大木 康

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が創立 50 周年を迎えられるに際し、一言お祝いを申し上げます。貴研究所が創設された 1964 年、個人的に想い起こせば太平洋戦争前後の東南アジアで抑圧された人々を解放すべく戦う日本人が活躍する『快傑ハリマオ』やアフリカのケニヤを舞台に日本人孤児ワタルがマサイ族の人々や動物たちと冒険を重ねる『少年ケニヤ』などの物語に熱中していた頃でした。そして、高度経済成長のなかでアパルトヘイト政策を取る南アフリカ共和国で日本人が「名誉白人」とみなされていることに、何の疑いも抱かないどころか、ある種の誇りさえ感じていたことを忸怩たる思いで顧みています。貴研究所の歩みは、まさにそうした日本人の通念となっていた“常識”を覆すだけでなく、いかにアジア・アフリカの自然や社会そして言語や文化などの真実を解明し、人々に伝えるかという苦闘の日々であったかと思います。しかし、多くの誤解はとけたにせよ、アジア・アフリカが孕む多様性と普遍性を直視することは日本人にとって今後ともに難題であり続けるとすれば、貴研究所のなお一層の活動に大きな期待がかけられています。皆さまの更なる御研究・教育の御進展と貴研究所の御清栄を祈念してやみません。

京都大学人文科学研究所長 山室 信一

According to the decree issued by the Scientific Committee in Japan in 1961, the ILCAA was founded in 1964 at the Tokyo University for Foreign Studies (TUFS). Its main objective was to strengthen the linguistic and educational bonds with similar institutes in Asian and African countries. Since 1989 it has been a continuous journey to understand the experience of modernizing Japan which witnessed an enormous success outside Western culture. I visited Japan regularly, published five books and dozens of scientific articles about it. I also visited several times TUFS to meet with its professors and students, and to benefit from its library. Furthermore I established a relation between TUFS and the department of literature at the Lebanese University. On the first of February 2006, I delivered a speech during the opening of the Japanese Center for Middle Eastern Studies in Beirut in the presence of many intellectual

Japanese and Lebanese personalities. Moreover the Center made several agreements of cooperation with the American University of Beirut and the German Institute for Eastern Studies in Lebanon. Beirut is an eternal center for dialogues among civilization, and the center succeeded in holding annual scientific conferences to develop cultural dialogue between Japan and Lebanon.

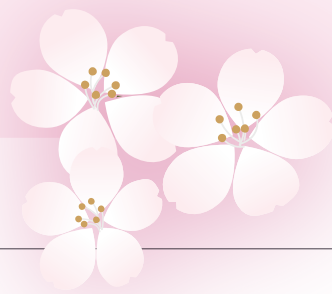
Massoud Daher, Professor,
Lebanese University

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa of Tokyo University of Foreign Studies has played a leading role in the promotion of scholarship and learning on Asia and Africa. The contribution of ILCAA scholars for the last five decades has been immense in all areas and ways. They have also been instrumental in promoting academic collaboration between Japanese and international scholars as well as institutions. I am both honoured and privileged to have been invited to write a brief message to the Institute on the occasion of the 50th Anniversary of its establishment. I have no doubt that ILCAA will continue to grow from strength to strength to harness its full potential.

Omar Farouk, Professor Emeritus,
Hiroshima City University

Congratulations to the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa on 50 years of high-quality research and publications, including international collaborative research and conferences. And best wishes for many, many more years of scientific productivity. The year I spent as a visitor to your Institute remains one of the highlights of my academic career. Cooperation with your institute has been an important aspect of our work in the Department of Linguistics of the Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology.

Bernard Comrie, Director,
Department of Linguistics, Max Planck Institute
for Evolutionary Anthropology



1995
一九九五（平七）

1992
一九九二（平四）

1991
一九九一（平三）

1983
一九八三（昭五八）

1978
一九七八（昭五三）

1974
一九七四（昭四九）

1967
一九六七（昭四二）

1964
一九六四（昭三九）

1961
一九六一（昭三六）

[歴代所長] [Successive directors]	岡 正雄 Masao Oka	徳永 康元 Yasumoto Tokunaga	北村 甫 Hajime Kitamura	梅田 博之 Hiroyuki Umeda	山口 昌男 Masao Yamaguchi	上岡 弘二 Koji Kamioka
	'64~'72	'72~'74	'74~'83	'83~'89	'89~'91	'91~'95

Designated as one of the Centers of Excellence (COE) by the Japanese Ministry of Education, 文部省から「卓越した研究拠点 (COE)」に指定。

Participation in doctoral program of the Graduate School of Area and Culture Studies, Tufs by some staff. 東京外国語大学大学院地域文化研究科に設置された博士後期課程の教育に所員が参加。

Integrating sixteen small sections into four major sections. 研究体制の抜本的見直しを行い、従来の小部門制（及び1客員部門）から4大部門制（及び1客員部門）に改編。

The office of the Overseas Scientific Research Coordination Team was established. 海外学術調査（当時、国際学術研究）総括班の事務局が置かれる。

The introduction of mainframe computer. メインフレーム・コンピュータを導入。

Intensive Language Course started in full swing. 言語研修を本格的に開始。

Programme for Extensive-Period Field Research started. 研究未開発地域への助手等の現地投入を開始。

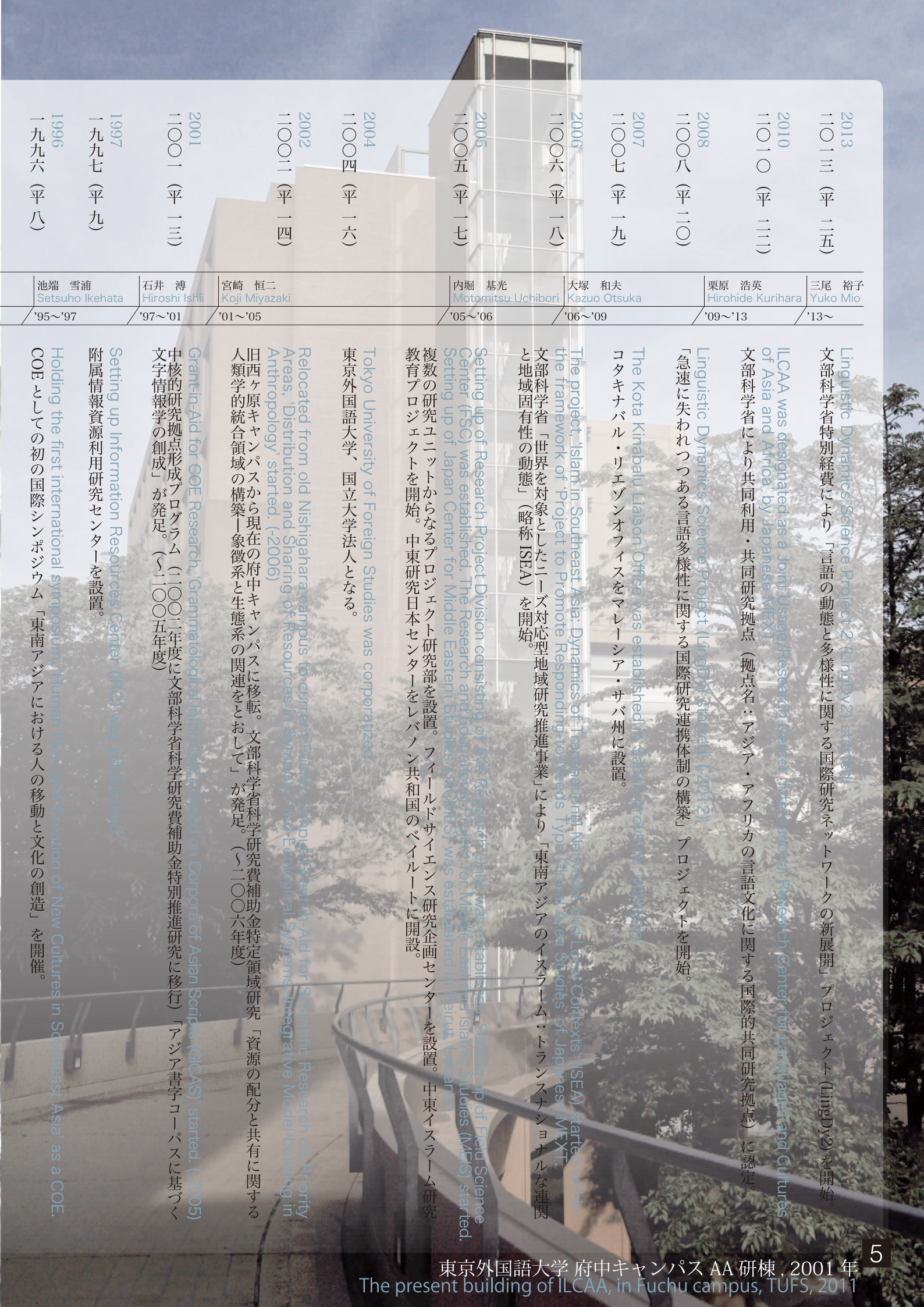
ILCAA was established as an affiliate of the Tokyo University of Foreign Studies, and as the first institution to be designated as an Inter-University Institution in humanities and social sciences in Japan. アジア・アフリカ言語文化研究所が東京外国語大学に附置。わが国最初の人文科学・社会科学系共同利用研究所。

The Science Council of Japan issued a recommendation to establish an inter-university research institution for the study of the languages and cultures of Asia and Africa. 日本学術会議が、アジア・アフリカ諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告。

Academic Chronology of Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

アジア・アフリカ言語文化研究所のあゆみ





2013	二〇一三 (平 二五)	三尾 裕子 Yuko Mio	'13~
2010	一〇一〇 (平 一二)	栗原 浩英 Hirohide Kurihara	'09~'13
2008	二〇〇八 (平 二〇)		
2007	二〇〇七 (平 一九)	大塚 和夫 Kazuo Otsuka	'06~'09
2006	二〇〇六 (平 一八)	内堀 基光 Motomitsu Uchibori	'05~'06
2005	二〇〇五 (平 一七)		
2004	二〇〇四 (平 一六)	宮崎 恒二 Koji Miyazaki	'01~'05
2002	二〇〇二 (平 一四)		
2001	二〇〇一 (平 一三)	石井 溥 Hiroshi Ishii	'97~'01
1997	一九九七 (平 九)	池端 雪浦 Setsuho Ikehata	'95~'97
1996	一九九六 (平 八)		

Linguistic Dynamics Science Project 2 (LingDy2) started.

文部科学省特別経費により「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開」プロジェクト (LingDy2) を開始。

ILCAA was designated as a Joint Usage/Research Center (International Research Center for Languages and Cultures of Asia and Africa) by Japanese MEXT.

文部科学省により共同利用・共同研究拠点 (拠点名: アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究拠点) に認定。

Linguistic Dynamics Science Project (LingDy) started. (-2012)

「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」プロジェクトを開始。

The Kota Kinabalu Liaison Office was established in Sabah province, Malaysia.
コタキナバル・リエゾンオフィスをマレーシア・サバ州に設置。

The project, 'Islam in Southeast Asia: Dynamics of Transnational Networks and Local Contexts' (ISEA) started within the framework of 'Project to Promote Responding-to-Needs Type Global Area Studies' of Japanese MEXT.

文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」により「東南アジアのイスラーム・トランスナショナルな連関と地域固有性の動態」(略称 ISEA) を開始。

Setting up of Research Project Division consisting of five Research Units was established. Setting up of Field Science Center (FSC) was established. The Research and Educational Project for Middle East and Islamic Studies (MERIS) started. Setting up of Japan Center for Middle Eastern Studies (JACMES) was established in Beirut, Lebanon.

複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置。フィールドサイエンス研究企画センターを設置。中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始。中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設。

Tokyo University of Foreign Studies was corporatized.
東京外国語大学、国立大学法人となる。

Relocated from old Nishigahara campus to current Fuchu campus Grant-in-Aid for Scientific Research on Priority Areas, 'Distribution and Sharing of Resources in Synthetic and Ecological Systems: Integrative Model-building in Anthropology' started. (-2006)

旧西ヶ原キャンパスから現在の府中キャンパスに移転。文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築―象徴系と生態系の関連をとおして」が発足。(-二〇〇六年度)

Grant-in-Aid for COE Research, 'Grammatological Informatics based on Corpora of Asian Scripts (GICAS)' started. (-2005)
中核的研究拠点形成プログラム (二〇〇二年度に文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」が発足。(-二〇〇五年度)

Setting up Information Resources Center (IRC) was established.
附属情報資源利用研究センターを設置。

Holding the first international symposium, 'Human Flow and Creation of New Cultures in Southeast Asia' as a COE.
COEとしての初の国際シンポジウム「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」を開催。



アジア・アフリカ言語文化研究所 所長

三 尾 裕 子

The Director,
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa,

50周年を迎えて

本年、アジア・アフリカ言語文化研究所は、創立50周年の節目の年を迎えることとなりました。創立当初は、戦後の日本の発展にとって、それまで研究が手薄であったアジア・アフリカ地域の研究を進めることでこの地域への理解を深め、それをベースにアジア・アフリカの諸社会と良好な関係を構築していくことが重要であると、深く認識されていたと考えられます。研究手法面では、所内の研究者と日本各地に分散している研究者との間での学際的共同研究を行うという、人文社会科学分野における新しい研究のスタイルの有効性を他に先駆けて示したのは、本研究所であると言えます。その結果、この50年の間には、個人研究だけではなく、共同研究プロジェクトを通じて所外の研究者との活発な共同研究が行われ、アジア・アフリカ地域の研究は格段に進展を遂げました。

2010年度に本研究所が、文部科学省が設定した新たな制度によって、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」に認定された背景には、こうした共同研究の有効性、研究者間の連携の重要性が認識されたことが関わっているとと言えます。今日では、グローバル化が進行し、地球上の諸社会の言語や文化が、急速な西洋化、あるいは均質化の方向に巻き込まれていかざるを得ない状況が現出しています。そのような中で、アジア・アフリカ地域の諸社会の多元的発展の可能性を追求するための基礎研究を行うためには、研究者間の連携がますます重要であることは、言うまでもありません。

50周年を迎え、本研究所の所員一同、今後も国内外の研究者コミュニティとの連携強化・拡大を進め、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」の名にふさわしい活動を展開すべく、気持ちを新たにしております。皆様のより一層のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

平成26年4月

Message from the Director

This year marks the fiftieth anniversary of the founding of the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA). At the time of inauguration in 1964, the Japanese government fully recognized the need to deepen understanding of areas in Asia and Africa hitherto little studied by Japanese scholars through research, and to use that as a base for establishing good relations with their societies, as vital for the development of post war Japan. ILCAA pioneered the efficacy of the then new research style of conducting multi-disciplinary research based on co-operation with scholars at universities and academic institutions scattered all over Japan. As a result, over the years we have achieved remarkable progress in research on the Asian and African region through dynamic collaboration with scholars from outside the Institute in our joint research projects as well as in research by individual staff members.

Recognition of the effectiveness of joint research and the importance of scholarly collaboration lay behind the designation of ILCAA as an "International Research Center for Languages and Cultures of Asia and Africa" by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) in 2010. Today with the spread of globalization, languages and cultures in societies all over the world are being irrevocably dragged in the direction of rapid westernization and homogenization. The need for scholars to collaborate in basic research that opens up possibilities for the pluralistic development of societies in Asia and Africa has never been more urgent.

As we approach our fiftieth anniversary, all staff members at ILCAA have renewed their determination to expand and strengthen collaboration with the scholarly community at home and abroad, and develop activities worthy of an "International Research Center for Languages and Cultures of Asia and Africa". We would greatly appreciate your constant guidance and support.

April 2014

「言語の動態と多様性に関する 国際研究ネットワークの新展開」 言語ダイナミクス科学研究プロジェクト2 (LingDy2)

Linguistic Dynamics Science Project 2 (LingDy2)



このプロジェクトは、本研究所の戦略的プロジェクトの一つであり、(1) 消滅の危機に瀕した言語や研究の十分進んでいない言語の記録・保存を推進し支援する(2) 人間言語の構造的多様性の本質、および、言語構造を決定する複雑なダイナミクスの研究を推進する、という2つの目的を持っています。

このプロジェクトは、言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)の一部をなすものであり、LingDy第1期(2008-2012年度)の成果をもとに構築され、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)の危機言語プロジェクトおよびドイツのマックス・プランク進化人類学研究所言語学部との活発な連携のもとに行われるものです。文部科学省の財政的支援による5年間のプロジェクトとして2013年に立ち上げられました。

このプロジェクトは、言語多様性の理解と保存の推進という目標をLingDy第1期から受け継ぎながら、話者コミュニティへのアウトリーチ活動(問題解決能力の開発と共同研究)と、学術的研究の成果を広く社会で応用することにも重点を置くという、より広い視野を持つプロジェクトです。言語多様性とその危機的状況の学術的研究は過去20年間に成熟を遂げました。その手法は今や明確に確立され、膨大な量の質の高い研究の成果が正規の出版物として数多く公開されています。しかしながらこのような学術的成果は、いまだ話者コミュニティやより広い社会に十分なインパクトを与えるには至っていません。

言語消滅の危機への対応がさらに緊急性を増すにつれ、研究機関が学術研究の社会への応用により深くかかわりを持つことが重要になってきています。LingDy第2期の活動が「コミュニティへのアウトリーチ」と「社会への応用」に重点を置くのは、こうした状況への対応です。LingDy第2期の究極の目的は、このプロジェクトの期間を越えて持続する自立した支援メカニズムを創出することにあります。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/lingdy/>

This is a strategic project of ILCAA that aims (1) to advance and support the documentation and conservation of endangered and under-studied languages; (2) to advance the research on the nature of the structural diversity among human languages and on the complex dynamics that shape the linguistic structure.

It is part of the larger-scale Linguistic Dynamics Science Project (LingDy) and builds on the work of the first phase of LingDy (AY2008-2012). It has active collaborative ties with the Endangered Language Project at the London University, School of Oriental and African Studies (SOAS) in Great Britain and with the Department of Linguistics at the Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology in Germany. It was launched in 2013 as a five-year project under the financial support from the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

The project inherits from LingDy-1 its commitment to the advancement of the understanding and preservation of linguistic diversity, but it also has a broader scope, with additional emphases on outreach activities (capacity-building and collaborative research) to the local speaker communities and application of academic research outcomes in wider social contexts. Although the academic research on linguistic diversity and endangerment has matured over the last two decades with a larger number of higher quality of research outcomes. However, the benefits of the outcomes have yet to make a direct impact on the local speaker communities and the wider society.

With the heightened urgency of language endangerment, it has become important for academic institutions to make a stronger commitment to the social application of academic research. LingDy-2's current emphases on 'community outreach' and 'social application' have emerged in response to this situation. The ultimate goal of this project is to create self-sustaining support mechanisms that will last well beyond the duration of the project.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/lingdy/>

言語研修

本研究所では毎年夏、専門研究者と母語話者を講師陣に迎え、アジア・アフリカ地域の研究を志す初学者を対象とした短期集中プログラムによる言語研修を実施しています。言語研修に参加することで、現地調査や文献研究を行うために必要な言語知識や調査の手法など、専門的知識も学ぶことができます。研修言語は、おもにアジア・アフリカ地域で話される少数民族の言語を含めた様々な言語を取り上げています。毎年、東京会場で2言語、大阪会場で1言語の研修を実施しています。これまでに実施された言語の数は、のべ127言語、修了者数のべ1,191名にのぼっています。修了者の中からは、大学や研究機関の職につき、アジア・アフリカ地域の専門家としての道を歩んでいく方々が輩出しています。

実施にあたっては、語学教育に造詣の深いAA研内外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、実施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。すべての研修において講師陣が独自に教材を開発していることも、AA研の言語研修の大きな特徴のひとつです。大阪会場で実施されるものは、大阪大学大学院言語文化研究科の協力を得て行われます。研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了証書が授与されます。

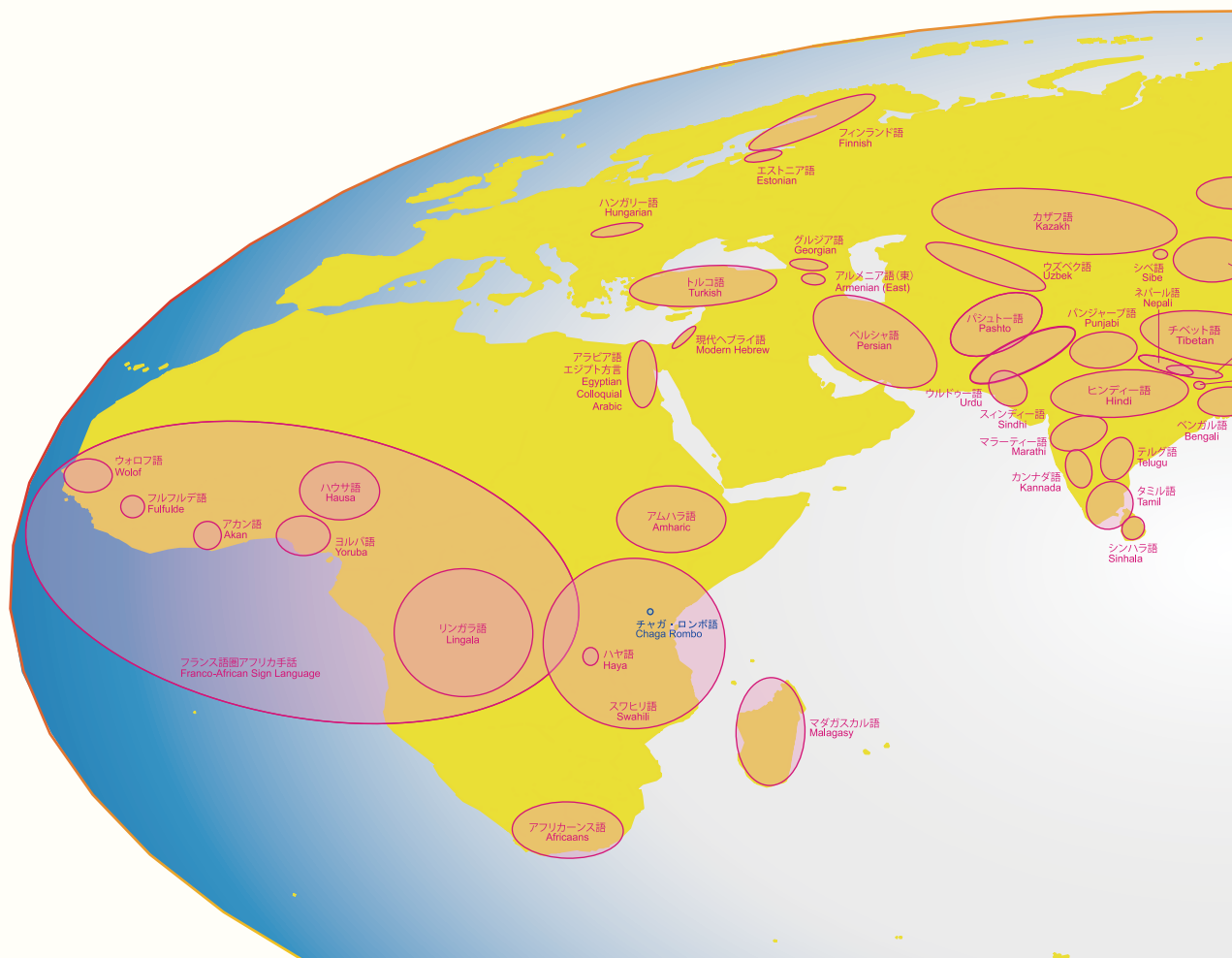
Intensive Language Courses

The Institute offers intensive courses on various Asian and African languages every summer.

The purposes of Intensive Language Courses are:

- to provide training of basic language skills to those who pursue Asian and African studies.
- to offer specialized knowledge of language(s) and of linguistic research that is essential to field research as well as to philological research.
- to improve basic learning environment of minor languages, for which materials are undeveloped, by compiling learning materials and improving them through the courses.

Each course is taught by a team of Japanese specialists and native speakers. To accomplish the above purposes, a committee consisting of the instructors, ILCAA staff, and outside experts of language education discuss teaching methods and execution plans. Moreover, the committee evaluates each course after the courses have taken place. Courses given at Osaka are conducted in cooperation with Graduate School of Language and Culture, Osaka University. Students are selected from applicants nationwide for each course. After successful completion of the course, the students may receive certificates from the Director of the Institute.



2006(平成18)年度より東京外国語大学の学部および大学院の開講科目となりました。

2013(平成25)年度は、ハウサ語、アルメニア語(東)(東京会場)、ウズベク語(大阪会場)の講座を開講しました。

2014(平成26)年度は、チャガ=ロンボ語、チャム語(東京会場)、タイ語中級(大阪会場)の講座を開講予定です。

現在、これまでに作成されてきた教材のウェブ上での公開も進めており、完成したものから順次公開しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/>

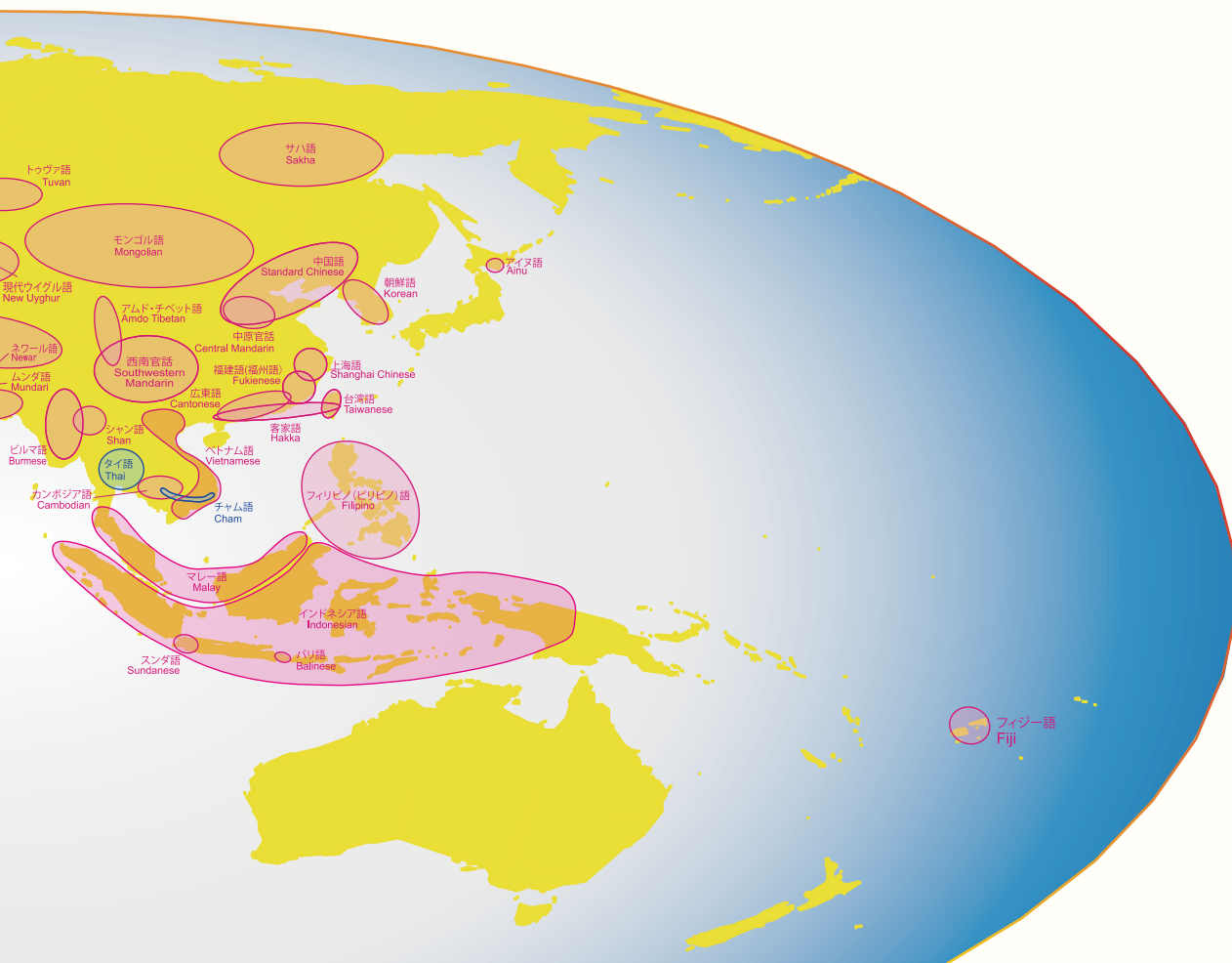
Intensive Languages Courses has also been served as classes of Tokyo University of Foreign Studies and its Graduate School since 2006AY.

In 2013AY, we had courses of Hausa and Armenian (East) in Tokyo, and a course of Uzbek in Osaka.

In 2014AY, we will have courses of Chaga Rombo and Cham in Tokyo, and an intermediate course of Thai in Osaka.

We are now carrying forward the publication of course materials developed so far.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/training/ilc/>



海外研究拠点

本研究所は、海外の研究者との連携と交流をより活発に行い、国際的な共同研究を展開していくために、ベイルート(レバノン)とコタキナバル(マレーシア)の2箇所に海外研究拠点を設置しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/satellite/>

Overseas Research Offices

In order to better coordinate and conduct joint research with scholars outside Japan, ILCAA maintains two satellite offices overseas: one in Beirut (Lebanon) and another in Kota Kinabalu (Malaysia).

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/satellite/>

中東研究日本センター(JaCMES)

中東研究日本センターは、AA研がレバノンの首都ベイルートに設置した初の海外研究拠点です。2005(平成17)年12月15日にレバノン政府閣議決定による認可を受けて、2006(平成18)年2月1日に開所式を行いました。

本センターは、AA研の共同利用・共同研究拠点としての機能を海外において展開すべく、次のような活動を行います。

1. 国際共同研究の推進: 共同利用・共同研究課題を海外の研究者とともにJaCMESで直接実施します。また、常駐の特任研究員を派遣して、長期の現地調査に専念させています。
2. 若手研究者報告会「日本の中東・イスラーム研究の最前線」: 日本の博士課程大学院生や学位取得後の若手研究者が最新の研究報告を行い、レバノンを始めとする中東現地の研究者と直接交流する機会を提供します。
3. 日本・中東関係講演会: 日本と中東の関係、日本におけるイスラームの歴史などを専門とする研究者を講演のために派遣し、交流の歴史と現状を紹介する機会を設けます。
4. ベイルートとレバノン情勢学術情報の紹介: ベイルートを中心とするレバノンの活発な学術・文化的活動の情報を収集し、レバノンとその周辺地域の激動する情勢を週単位で追跡し、ウェブサイトで公開して紹介しています。

コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

コタキナバル・リエゾンオフィスは、マレーシア・サバ州政府により設立されたサバ開発研究所(Institute for Development Studies, Sabah)の全面的な協力により、AA研の東南アジアにおける政治・社会・文化に関する総合的学術研究拠点として、2008(平成20)年3月1日、同研究所内に設置されました。サバ州は、ブルネイ、インドネシア、フィリピンなどの東ASEAN成長地域、南シナ海及びインド洋の交差点にあたり、多様な文化の交流の場となっています。アジア海域世界の動態の解明にとって最適な地の利を活かし、マレーシア、日本および関連諸国の研究者とともに多様な国際的共同研究プログラムを推進します。

Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)

JaCMES is the first overseas satellite office established by ILCAA. It is located in Beirut (Lebanon). It was officially sanctioned by the Lebanese government's cabinet resolution of December 15, 2005. The inauguration ceremony of JaCMES took place on February 1, 2006.

In order to promote academic exchange between Japan and the Middle East and to support young Japanese researchers of Middle Eastern Studies, JaCMES has developed joint research project functions by conducting the following activities:

1. Joint research meetings and international symposia involving Lebanese researchers
2. Workshops for young Japanese researchers
3. Dispatch of young Japanese researchers to the Middle Eastern Area
4. Introduction of academic information about Lebanon on the web site

Kota Kinabalu Liaison Office (KKLO)

Kota Kinabalu Liaison Office is now open in the Institute for Development Studies (IDS) which was established by the Sabah State Government. It serves as an integrated base for social, economic and cultural studies and academic exchange activities in Sabah with the generous cooperation and assistance from IDS. This Liaison Office aims to promote international academic exchanges, forming international networks, strengthening joint research activities in order to advance studies on Southeast Asian countries.

概要

Overview

ミャンマー、ヤンゴン中心街西側
West side of Yangon Downtown, Myanmar
撮影：澤田英夫
PHOTO: SAWADA, Hideo

11

AA
50th
ILCAA
1964-2014



AA研の研究活動

アジア・アフリカ言語文化研究所(以下、AA研)は、文部科学大臣によって言語学・文化人類学・地域研究分野の共同利用・共同研究拠点に認定された「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」です。その使命を達するため、本研究所では主に以下の3つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進してきました。

- (1) 臨地研究(フィールドサイエンス)に基づく国際的研究拠点としての共同利用・共同研究
- (2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編集および研究成果の発信
- (3) 研究活動および研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

このうち、特に(1)と(3)の推進にあたっては、本研究所が設置・運営している2つの海外拠点も有効に活用し、国境を越えた現地共同研究や、国外の関連研究者の参加を得る形で次世代研究者養成を実現しています。

2014(平成26)年度には、新たに11の共同利用・共同研究課題が発足しました。これらの研究課題は、AA研所員が、国内外で最先端の研究を行っている300名を超える研究者と緊密に連絡を取りながら展開しています。すべての研究課題は公募のうえ、所外の研究者が過半数を占める委員会による厳格な審査を経て採択されたものです。

一方、2010(平成22)年度からは、「言語ダイナミクス科学研究」「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」の4つを研究所の基幹研究に指定しました。4つの基幹研究は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究費や特別教育研究経費(拠点形成)を得てすでに研究所内に形成されている「アジア書字コーパス拠点」「中東イスラーム研究拠点」と並ぶAA研の顔として、公募による共同利用・共同研究課題と連携しつつ、強力かつ集中的な共同研究を進めています。

こうした実績が認められ、2013(平成25)年度末に文部科学省が公表した「ミッションの再定義」でも、本研究所のミッションは「アジア・アフリカ諸言語の正確な理解と言語多様性の記録に貢献する」とともに、「海外研究拠点を通じてイスラームやアジア・アフリカの諸問題の正確な理解に基づく解決に貢献し」、「その研究成果を国際的に発信する」とこととされています。

Research Activities of ILCAA

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) has been approved as an “International Research Center for Languages and Cultures of Asia and Africa” by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) with the mission of serving as a joint research institution in the fields of linguistics, cultural anthropology and area studies.

To fulfil this mission ILCAA conducts joint research in collaboration with outside scholars mainly in the following three fields:

- (1) Joint research as an International Research Center based on field science.
- (2) The collection, analysis, and editing of research resources concerning the languages and cultures of Asia and Africa, and the dissemination of research findings.
- (3) The fostering of future generation of researchers. This is done through research activities, training programs, publication and editing.

Regards (1) and (3), ILCAA utilises its two Overseas Satellite Offices to foster future generations of researchers by conducting joint research locally that transcends national boundaries and includes non-Japanese scholars as well.

The year 2014 has seen the inauguration of eleven new joint research projects. Joint research projects are conducted in close collaboration with over 300 leading researchers from both inside and outside ILCAA. All Joint research projects are publically advertised, and are selected through strict screening by a committee, of which over half of the members come from outside ILCAA.

In 2010 ILCAA designated the following four projects as core research programs: “Linguistic Dynamics Science Researches”, “Anthropological Explorations into the Linkage of Micro-Macro Perspectives”, “Human Mobility and Formation of Plural Societies in the Middle East and the Muslim World” and “Pluralistic World Understanding based on African Studies”. These four core research programs were funded by MEXT Grants-in-Aid for Scientific Research, and have become the main features of ILCAA activities along with our two COE (Centers of Excellence) academic institutions; the “Grammatological Informatics based on Corpora of Asian Scripts (GICAS)” and the “Middle East and Islamic Studies (MEIS)”. They collaborate with the publically advertised joint research projects, in the implementation of vigorous and intensive joint research.

Our achievements have been acknowledged in the “redefinition of missions” which was officially announced by MEXT at the end of the academic year of 2013. MEXT has clearly stipulated that the mission of ILCAA is “to contribute to the correct understanding of the languages of Asia and Africa and the documentation of linguistic diversity”, “to contribute to the solution of issues concerning Islam, Asia and Africa by a correct understanding of them through its Overseas Satellite Offices”, and “to disseminate research findings internationally”.

研究・運営体制

共同利用・共同研究拠点である本研究所には、研究者コミュニティの意向をいっそう明確に拠点運営に反映し機能を適切に遂行するために、外部の研究者を含む以下の委員会が置かれています。

2014(平成26)年度の各委員会の概要と、それぞれの委員は次のとおりです。

運営委員会

運営委員会は、過半数を占める外部委員(AA研の共同研究の主要分野の研究者等)とAA研内部から選出された委員とで組織されます。運営委員会は、AA研の共同利用・共同研究の重要事項および研究活動全般に関する協議を行います。

井野瀬 久美恵(甲南大学文学部教授)
 宇山 智彦(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授)
 栗林 均(東北大学東北アジア研究センター教授)
 小林 正人(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)
 佐藤 洋一郎(京都産業大学教授)
 清水 展(京都大学東南アジア研究所教授)
 棚橋 訓(お茶の水女子大学文教育学部教授)
 西尾 哲夫(国立民族学博物館教授)
 渡邊 興亜(総合研究大学院大学名誉教授)
 三尾 裕子(AA研所長)
 飯塚 正人(AA研副所長)
 中山 俊秀(AA研情報資源利用研究センター長)
 真島 一郎(AA研フィールドサイエンス研究企画センター長)
 クリスチャン・ダニエルス(AA研)
 西井 涼子(AA研)
 稗田 乃(AA研)

Evaluation System of Research and Organization

Administrative and research activities at ILCAA are conducted through and / or monitored by various special boards and committees. All the boards and committees include eminent scholars and specialists from outside the Institute, in order to reflect the opinions of the academic community and to maintain transparency in the operation of ILCAA.

The role of each board and committee and its members in academic year 2014 are presented below.

Advisory Board

The Advisory Board acts as an advisory body to the Director in all matters pertaining to the operations of ILCAA. The Board consists of ILCAA staff, and eminent scholars and specialists from other institutions, thus representing the inter-university nature of the Institute.

- INOSE, Kumie. Prof., Faculty of Letters, Konan University
- KOBAYASHI, Masato. Assoc. Prof., Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo
- KURIBAYASHI, Hitoshi. Prof., Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, Sendai
- NISHIO, Tetsuo. Prof., National Museum of Ethnology, Osaka
- SATO, Yoichiro. Prof., Kyoto Sangyo University
- SHIMIZU, Hiromu. Prof., Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
- TANAHASHI, Satoshi. Prof., Faculty of Letters and Education, Ochanomizu University
- UYAMA, Tomohiko. Prof., The Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
- WATANABE, Okitsugu. Prof. Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies, Hayama
- DANIELS, Christian Ashley. ILCAA
- HIEDA, Osamu. ILCAA
- IIZUKA, Masato. ILCAA
- MAJIMA, Ichiro. ILCAA
- MIO, Yuko. ILCAA
- NAKAYAMA, Toshihide. ILCAA
- NISHII, Ryoko. ILCAA

**共同研究専門委員会**

共同研究専門委員会は、過半数を占める外部委員（AA研の共同研究の主要分野の研究者等）とAA研内部から選出された委員とで組織されます。AA研が公募する共同研究課題の審査および実施中の共同研究課題の評価を行います。

井上 優（麗澤大学外国語学部教授）
 倉沢 愛子（慶應義塾大学名誉教授）
 杉山 祐子（弘前大学人文学部教授）
 速水 洋子（京都大学東南アジア研究所教授）
 藤代 節（神戸市看護大学看護学部准教授）
 横山 伊徳（東京大学史料編纂所教授）
 吉澤 誠一郎（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）
 米田 信子（大阪大学大学院言語文化研究科教授）
 三尾 裕子（AA研所長）
 飯塚 正人（AA研副所長）
 中山 俊秀（AA研情報資源利用研究センター長）
 真島 一郎（AA研フィールドサイエンス研究企画センター長）
 クリスチャン・ダニエルズ（AA研）
 西井 凉子（AA研）
 稗田 乃（AA研）

研修専門委員会

研究所が主催する言語研修およびその他の研修事業に関する専門的事項について、所長の諮問に応じます。

岸田 文隆（大阪大学大学院言語文化研究科教授）
 久保 智之（九州大学大学院人文科学府教授）
 南田 みどり（大阪大学名誉教授）
 吉田 和彦（京都大学大学院文学研究科教授）
 澤田 英夫（AA研）
 芝野 耕司（AA研）
 中見 立夫（AA研）
 峰岸 真琴（AA研）
 呉人 徳司（AA研）
 椎野 若菜（AA研）
 塩原 朝子（AA研）
 山越 康裕（AA研）

Committee for Research Collaboration

The committee, composed of both ILCAA staff and outside members, functions to maintain a transparent research collaboration system at the Institute.

- FUJISHIRO, Setsu. Assoc. Prof., Kobe City College of Nursing
- HAYAMI, Yoko. Prof., Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
- INOUE, Masaru. Prof., Faculty of Foreign Studies, Reitaku University, Chiba
- KURASAWA, Aiko. Prof. Emeritus, Keio University, Tokyo
- SUGIYAMA, Yuko. Prof., Faculty of Humanities, Hirosaki University, Aomori
- YOKOYAMA, Yoshinori. Prof., Historiographical Institute, the University of Tokyo
- YONEDA, Nobuko. Prof., Graduate School of Language and Culture Studies in Language and Culture, Osaka University
- YOSHIZAWA, Seiichiro. Assoc. Prof., Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo
- DANIELS, Christian Ashley. ILCAA
- HIEDA, Osamu. ILCAA
- IIZUKA, Masato. ILCAA
- MAJIMA, Ichiro. ILCAA
- MIO, Yuko. ILCAA
- NAKAYAMA, Toshihide. ILCAA
- NISHII, Ryoko. ILCAA

Committee for Language Training

The committee is responsible for the language and linguistics training hosted by the Institute, such as Intensive Language Courses and Field Linguistics Workshops.

- KISHIDA, Fumitaka. Prof., Graduate School of Language and Culture, Osaka University
- KUBO, Tomoyuki. Prof., Graduate School of Humanities, Kyushu University
- MINAMIDA, Midori. Prof. Emeritus, Osaka University
- YOSHIDA, Kazuhiko. Prof., Graduate School of Letter, Kyoto University
- MINEGISHI, Makoto. ILCAA
- NAKAMI, Tatsuo. ILCAA
- SAWADA, Hideo. ILCAA
- SHIBANO, Kohji. ILCAA
- KUREBITO, Tokusu. ILCAA
- SHIINO, Wakana. ILCAA
- SHIOHARA, Asako. ILCAA
- YAMAKOSHI, Yasuhiro. ILCAA

海外調査専門委員会

本研究所が行う海外学術調査総括班事業および海外学術調査に関する専門的事項について、所長の諮問に応じます。

伊藤 元己(東京大学大学院総合文化研究科教授)
 梅崎 昌裕(東京大学大学院医学系研究科准教授)
 岡本 正明(京都大学東南アジア研究所准教授)
 木村 秀雄(東京大学大学院総合文化研究科教授)
 窪田 順平(総合地球環境学研究所研究推進戦略センター教授)
 曾我 亨(弘前大学人文学部教授)
 高樋 さち子(秋田大学教育文化学部准教授)
 蓮井 和久(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科講師)
 藤田 耕史(名古屋大学環境学研究科准教授)
 本山 秀明(国立極地研究所教授)
 西井 涼子(AA研)
 深澤 秀夫(AA研)
 真島 一郎(AA研)
 荒川 慎太郎(AA研)
 太田 信宏(AA研)
 近藤 信彰(AA研)
 塩原 朝子(AA研)
 床呂 郁哉(AA研)
 山越 康裕(AA研)
 荻谷 康太(AA研)

編集専門委員会

研究所の出版・広報の方針の設定及び出版物の審査などに関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

石川 登(京都大学東南アジア研究所教授)
 岩田 礼(金沢大学大学院人間社会環境研究科教授)
 濱田 正美(龍谷大学教授)
 森口 恒一(静岡大学名誉教授)
 吉澤 誠一郎(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)
 和崎 春日(中部大学国際関係学部教授)
 黒木 英充(AA研)
 深澤 秀夫(AA研)
 伊藤 智ゆき(AA研)
 太田 信宏(AA研)
 呉人 徳司(AA研)
 近藤 信彰(AA研)
 陶安 あんど(AA研)
 床呂 郁哉(AA研)

Committee for the Overseas Scientific Research Coordination Team

The committee is responsible for maintaining the activities of the Overseas Scientific Research Coordination Team (OSC).

- FUJITA, Koji. Assoc. Prof., Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University
- HASUI, Kazuhisa. Lecturer, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences
- ITO, Motomi. Prof., Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo
- KIMURA, Hideo. Prof., Graduate School of Arts and Sciences, the University of Tokyo
- KUBOTA, Junpei. Prof., Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto
- MOTOYAMA, Hideaki. Prof., National Institute of Polar Research, Tokyo
- OKAMOTO, Masaaki. Assoc. Prof., Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
- SOGA, Toru. Prof., Faculty of Humanities, Hirosaki University, Aomori
- TAKAHI, Sachiko. Assoc. Prof., Faculty of Education and Human Studies, Akita University
- UMESAKI, Masahiro. Assoc. Prof., Graduate School of Medicine, the University of Tokyo
- FUKAZAWA, Hideo. ILCAA
- MAJIMA, Ichiro. ILCAA
- NISHII, Ryoko. ILCAA
- ARAKAWA, Shintaro. ILCAA
- KONDO, Nobuaki. ILCAA
- OTA, Nobuhiro. ILCAA
- SHIOHARA, Asako. ILCAA
- TOKORO, Ikuya. ILCAA
- YAMAKOSHI, Yasuhiro. ILCAA
- KARIYA, Kota. ILCAA

Editorial Committee

The editorial committee advises the director on matters relating to the policy and screening of publications of the Institute.

- HAMADA, Masami. Prof. Emeritus, University of Kyoto/Prof., Ryukoku University, Kyoto
- ISHIKAWA, Noboru. Prof., Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
- IWATA, Rei. Prof., Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University
- MORIGUCHI, Tsunekazu. Prof. Emeritus, Shizuoka University
- WAZAKI, Haruka. Prof., College of International Studies, Chubu University, Aichi
- YOSHIKAWA, Seiichiro. Assoc. Prof., Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo
- FUKAZAWA, Hideo. ILCAA
- KUROKI, Hidemitsu. ILCAA
- ITO, Chiyuki. ILCAA
- KONDO, Nobuaki. ILCAA
- KUREBITO, Tokusu. ILCAA
- OTA, Nobuhiro. ILCAA
- SUEYASU / HAFNER, Arnd, Helmut. ILCAA
- TOKORO, Ikuya. ILCAA



海外拠点専門委員会

本研究所の海外拠点における共同利用・共同研究に関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

内堀 基光(放送大学教養学部教授)
奥田 敦(慶應義塾大学総合政策学部教授)
私市 正年(上智大学アジア文化研究所教授)
酒井 啓子(千葉大学法政経学部教授)
長沢 栄治(東京大学東洋文化研究所教授)
坂坂 修司(財団法人日本エネルギー経済研究所中東研究センター研究理事／副センター長)
黒木 英充(AA研)
塩原 朝子(AA研)
床呂 郁哉(AA研)

国際諮問委員会

国際的な視点から共同利用・共同研究に関し、所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

ERKINOV, Aftandil. Chief Editor, “Tamaddun” publishing house
PANGILINAN, Michael Raymon Manaloto (Researcher, Archivist
& Lecturer, the Film Academy of Pampanga)
烏蘭(Wulan)(中国社会科学院民族学与人类学研究所研究員)
河合 香吏(AA研)
渡辺 己(AA研)
伊藤 智ゆき(AA研)
近藤 信彰(AA研)

中東研究日本センター諮問委員会

レバノン共和国ベイルート市に設置された中東研究日本センター(JaCMES)の活動に関わる事項について、所長の諮問に応じます。

ABU-HUSAYN, Abdul-Rahim (Prof., Faculty of Arts and Sciences, American University of Beirut)
AZAR, Pierre (Prof., Saint Joseph University)
DAHER, Massoud (Prof., Faculty of Literature and Human Sciences, Lebanese University)
黒木 英充(AA研)

Committee for Overseas Research Office

The committee is in charge of discussing important matters pertaining to the Overseas Research Offices.

- HOSAKA, Shuji. Assistant Director / Senior Research Fellow, JIME center, The Institute of Energy Economics, Japan
- KISAICHI, Masatoshi. Prof., Institute of Asian Studies, Sophia University, Tokyo
- NAGASAWA, Eiji. Prof., the Institute of Oriental Culture, the University of Tokyo
- OKUDA, Atsushi. Prof., Faculty of Policy Management, Keio University, Tokyo
- SAKAI, Keiko. Prof., Faculty of Law, Politics & Economics, Chiba University
- UCHIBORI, Motomitsu. Prof., The Open University of Japan
- KUROKI, Hidemitsu. ILCAA
- SHIOHARA, Asako. ILCAA
- TOKORO, Ikuya. ILCAA

International Advisory Board

The committee advises the director on matters relating to the research collaboration system of the Institute from an international perspective.

- ERKINOV, Aftandil. Chief Editor, “Tamaddun” publishing house
- PANGILINAN, Michael Raymon Manaloto. Secretary, National Commission for Culture and the Arts (NCCA), Philippines
- Borjigijin Ulayan (Wulan). Researcher, Institute of Ethnology and Anthropology Chinese Academy of Social Sciences
- KAWAI, Kaori. ILCAA
- WATANABE, Honoré. ILCAA
- ITO, Chiyuki. ILCAA
- KONDO, Nobuaki. ILCAA

International Advisory Committee for the Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)

The committee is responsible for advising the director on matters pertaining to JaCMES from an international perspective.

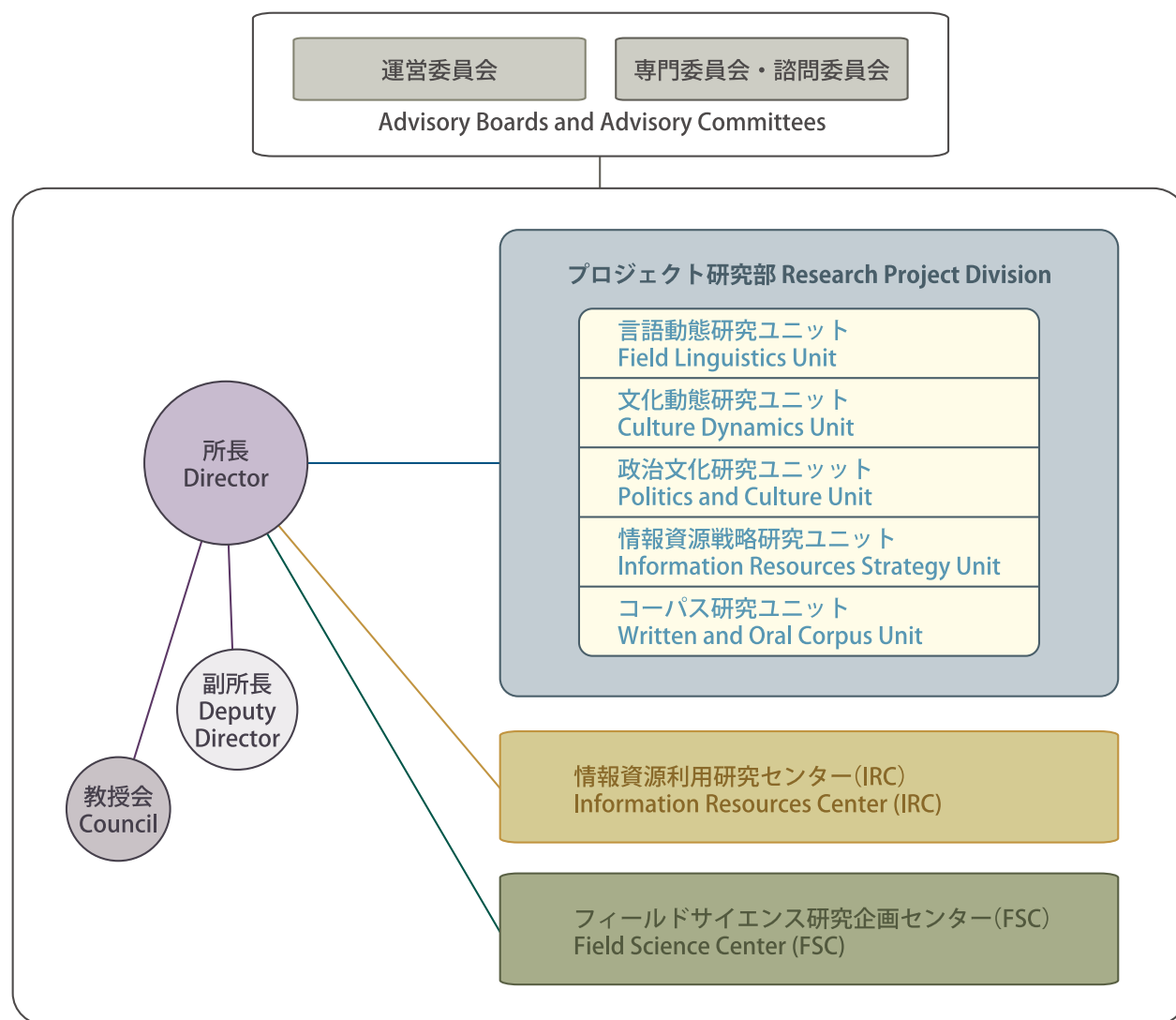
- ABU-HUSAYN, Abdul-Rahim. Prof., Faculty of Arts and Sciences, American University of Beirut
- AZAR, Pierre. Prof., Saint Joseph University
- DAHER, Massoud. Prof., Faculty of Literature and Human Sciences, Lebanese University
- KUROKI, Hidemitsu. ILCAA

研究組織構成

本研究所は5つの研究ユニット（言語動態、文化動態、政治文化、情報資源戦略、コーパス）から成る1プロジェクト研究部および2つのセンター（情報資源利用研究、フィールドサイエンス研究企画）という組織体制をとっています。所員はいずれかのユニットまたはセンターに所属しています。そして、個々の専門研究領域に関わる探究を深めながら、基幹研究、共同利用・共同研究課題などにも参画し、国内外の研究者との密接な協力に基づいて、共同利用・共同研究拠点にふさわしい活動を推進しています。

Organization

The Institute consists of the Research Project Division, comprising five research units (Field Linguistics, Culture Dynamics, Politics and Culture, Information Resources Strategy, and Written and Oral Corpus) and two centers (Information Resources Center and Field Science Center). All Institute staff members belong to one of these units or centers, and while pursuing their individual research, they organize and conduct joint research projects with scholars within and outside the Institute and also with those outside Japan. The Institute fully deploys these resources to meet its commitment to promote the research activities worthy of a truly international research center.





情報資源利用研究センター (IRC)

IRCは、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的とするAA研の附置センターです。以下の活動方針に基づいて活動を行っています。

- (1) 研究資源構築と体系化: AA研およびそのスタッフや外部研究者が所蔵するアジア・アフリカの言語文化に関する資料や共同研究の成果のデジタル化と公開を支援し、研究資源の蓄積につとめます。
- (2) 研究資源をインターネットにおいて積極的に公開・発信し、国内外の研究者コミュニティの利用に供します。
- (3) 研究資源の共有と共同研究に関する手法の探究を進めます。
- (4) IRCにおいて構築した研究手法を用いて、所外にも開かれた共同研究を推進し、研究手法の普及、発展を目指します。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/organization/irc/>

フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

FSCは、AA研の研究活動の特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に洗練させて、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」を構築するとともに、調査関連データを体系的に蓄積し、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。現在、FSCの活動は次の4本の柱からなっています。

- (1) 臨地調査に関わる研究手法の開発: 「フィールドサイエンス・コロキウム」という研究会を随時開催し、調査手法やデータの意味づけ、研究者と研究対象の関係性の問題などを議論し、情報・知識・経験の共有化を目指します。
- (2) 海外研究拠点の設置・運営: 国際共同研究を展開するため、2つの海外研究拠点(p.10)を中心に学術交流を推進しています。
- (3) 海外学術調査総括班(OCS)(p.36)事務局としての活動: 「海外学術調査フォーラム」を開催して、ワークショップ、情報交換のための全体会議、地域別分科会を実施しています。
- (4) 地域研究コンソーシアム(JCAS)(p.37)との連携: AA研はJCASの幹事組織の1つで、FSCはその連携活動の窓口となっています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/organization/fsc/>

Information Resources Center (IRC)

IRC is a research center within ILCAA that serves and assists the academic community both within Japan and abroad; it is committed to collecting, compiling, storing, and disseminating information resources on the languages and cultures of Asia and Africa. The activities of IRC are broadly classified into the following categories:

- (1) Development and compilation of digital research resources on the basis of linguistic and cultural materials collected in field research and those produced through joint research activities;
- (2) Disseminating online digital research resources;
- (3) Advancing research on methods of resource sharing and research collaboration;
- (4) Developing joint research projects with outside researchers by application of the method developed by IRC.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/about/organization/irc/>

Field Science Center (FSC)

The original purpose of FSC is to establish 'field science' as a discipline by developing methods of field research in humanities, social and natural sciences. It also serves as a center for systematic accumulation of records of field research conducted by Japanese scholars and for enhanced collaboration and communication between them. FSC has the following foci of activity.

- (1) Development of theory and practical methods of field sciences: FSC organizes open seminars "Field Science Colloquium" on the issues
- (2) Establishing and managing two satellite research offices. (p.10)
- (3) Activity of the office of Overseas Scientific Coordination Team (OCS)(p.36): organizing "OSC Forum" consisting of a workshop, a general meeting for information exchange, and sessions for each region.
- (4) Collaboration with the Japan Consortium for Area Studies (JCAS) (p.37): FSC functions as gateway of JCAS collaborative interaction in ILCAA.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/about/organization/fsc/>



スタッフ

Staff

【専任教員】

本研究所に専任で所属し個々の研究を行うほか、アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同利用・共同研究拠点の機能を十分に発揮するために共同研究等を組織することによって、研究者コミュニティへの情報提供を行うとともに、国内外の研究者をつなげる役を果たします。

【外国人研究員】

本研究所では、共同研究やさまざまな研究活動を通じた交流と学術研究の推進を図るため、例年4～6名の研究員を、6ヶ月～1年間の期間で外国から招へいしています。外国人研究員には「客員教授」または「客員准教授」の肩書きが与えられます。

言語動態研究ユニット

教 授	※稗田 乃	アフリカ言語学
准 教 授	伊藤 智ゆき	音韻論、中期朝鮮語、中国語中古音
准 教 授	呉人 徳司	言語学、チュクチ語

文化動態研究ユニット

教 授	※三尾 裕子	東アジアの人類学
教 授	河合 香史	人類学、東アフリカ牧畜民研究
准 教 授	椎野 若菜	社会人類学、東アフリカ民族誌

Research staff

Research staff are full-time researchers of ILCAA. They conduct their own individual researches and are responsible for organizing and conducting collaborative research projects with researchers outside of ILCAA; they have an obligation to connect researchers within Japan and also with those outside Japan.

Visiting Professors and Scholars

ILCAA offers visiting positions (at the rank of Prof. or Assoc. Prof.) that allow international researchers to spend six to eleven months at ILCAA in order to conduct collaborative research projects with the ILCAA research staff and researchers in Japan. Four to six researchers are in residence every year.

Field Linguistics Unit

- * HIEDA, Osamu. Prof., Studies of African Languages
- ITO, Chiyuki. Assoc. Prof., Phonology, Middle Korean, Ancient Chinese
- KUREBITO, Tokusu. Assoc. Prof., Chukchi Language

Culture Dynamics Unit

- * MIO, Yuko. Prof., East Asian Anthropology
- KAWAI, Kaori. Prof., Anthropology, East African Pastoralism
- SHIINO, Wakana. Assoc. Prof., Social Anthropology, Ethnography of East Africa

**政治文化研究ユニット**

教 授	※クリスチャン・ダニエルズ	中国西南部・タイ文化圏の歴史
教 授	栗原 浩英	ベトナム現代史
准 教 授	石川 博樹	アフリカの歴史

情報資源戦略研究ユニット

教 授	※町田 和彦	南アジアの言語学、文字情報学
教 授	高島 淳	宗教学・インド宗教史(ヒンドゥー教)、言語情報処理
教 授	中見 立夫	東アジア・内陸アジアの国際関係史
准 教 授	陶安 あんど	法社会学、中国法制史、中国古文字学
客員教授	烏蘭 (Wulan)	モンゴル史、モンゴル語歴史文献の研究 (2014.1.6～2014.7.31)

コーパス研究ユニット

教 授	※芝野 耕司	マルチメディア・データベース、多言語処理論、CALL
教 授	峰岸 真琴	オーストロアジア諸語、タイ語学
教 授	宮崎 恒二	オーストロネシア社会

情報資源利用研究センター

教 授	※中山 俊秀	ワカシュ諸言語(北米北西海岸)、使用基盤言語学、言語類型論
教 授	飯塚 正人	イスラーム学・中東地域研究
教 授	小田 淳一	計量文献学
教 授	澤田 英夫	ビルマ系少数言語の記述、東南アジア大陸部インド系文字の体系
教 授	渡辺 己	セイリッシュ語
准 教 授	高松 洋一	オスマン朝史、古文書学、アーカイブズ学
准 教 授	錦田 愛子	中東地域研究
准 教 授	星 泉	チベット文化圏の言語学
助 教	児倉 徳和	記述言語学、シベ語(満州語口語)
助 教	佐久間 寛	人類学、アフリカ地域研究

Politics and Culture Unit

- * DANIELS, Christian Ashley. Prof., History of Southwest China and Mainland Southeast Asia
- * KURIHARA, Hirohide. Prof., Contemporary Vietnamese History
- * ISHIKAWA, Hiroki. Assoc. Prof., History of Sub-Saharan Africa

Information Resources Strategy Unit

- * MACHIDA, Kazuhiko. Prof., Indo-Aryan Languages, Grammatological Informatics
- * NAKAMI, Tatsuo. Prof., International Relations in East and Inner Asia
- * TAKASHIMA, Jun. Prof., History of Religions, Hinduism, Computer-aided Text Analysis
- * SUEYASU/HAFNER, Arnd Helmut. Assoc. Prof., Sociology of Law, Chinese Legal History, Chinese Paleography
- * Borjigijin Ulayan (Wulan). Visiting Prof., History of the Mongols and Mongolian Historical Sources (Jan. 6, 2014 – Jul. 31, 2014)

Written and Oral Corpus Unit

- * SHIBANO, Koji. Prof., Multimedia Database Systems, Multilingual Information Processing, Computer Assisted Language Learning
- * MINEGISHI, Makoto. Prof., Austroasiatic Languages, Thai language
- * MIYAZAKI, Koji. Prof., Anthropology of Austronesian Societies

Information Resources Center (IRC)

- * NAKAYAMA, Toshihide. Prof., Wakashan Languages (North American Pacific Northwest Coast), Usage-based Linguistics, Linguistic Typology
- * IIZUKA, Masato. Prof., Islamic Studies, Middle Eastern Studies
- * ODA, Jun'ichi. Prof., Bibliometrics
- * SAWADA, Hideo. Prof., Description of Burmish Minority Languages; Study of the Systems of Indic Scripts in Mainland Southeast Asia
- * WATANABE, Honoré. Prof., Salishan Languages
- * HOSHI, Izumi. Assoc. Prof., Linguistics of Tibetan Area
- * NISHIKIDA, Aiko. Assoc. Prof., Middle Eastern Studies
- * TAKAMATSU, Yoichi. Assoc. Prof., Ottoman History, Diplomats, Archival Science
- * KOGURA, Norikazu. Assist. Prof. Descriptive Linguistics, Sibe (Spoken Manchu)
- * SAKUMA, Yutaka. Assist. Prof. Anthropology, African Area Studies

フィールドサイエンス研究企画センター

教 授	※真島 一郎	西アフリカの人類学
教 授	黒木 英充	中東地域研究・東アラブ近代史
教 授	西井 涼子	東南アジア大陸部の人類学
教 授	深澤 秀夫	マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
准 教 授	荒川 慎太郎	西夏語学、西夏語文献学
准 教 授	太田 信宏	南アジアの歴史
准 教 授	近藤 信彰	イラン近代史
准 教 授	塩原 朝子	言語学、インドネシア諸言語
准 教 授	床呂 郁哉	東南アジア島嶼部の人類学
准 教 授	山越 康裕	モンゴル諸語
助 教	荻谷 康太	西アフリカ地域研究、イスラーム研究
客員教授	ELKINOV, Aftandil	テュルク語・ペルシャ語の文芸 (2014.4.1～2014.7.31)
客員准教授	PANGILINAN, Michael Raymon Manaloto	アーカイブズ学 (2013.10.1～2014.7.31)

※はユニット長およびセンター長を表す

【特任研究員・研究機関研究員】

本研究所の専攻分野について高度な研究能力を持ち、将来、学界での活躍が期待される若手研究者を、一定期間にわたり本研究所で雇用しています。

特任研究員

阿 部 優 子	バントゥ諸語
梅 川 通 久	地域情報学、地理情報分析
梅 谷 博 之	モンゴル語
中 村 恭 子	日本画
松 田 訓 典	インド大乘仏教

研究機関研究員

海老原 志穂	記述言語学、チベット語方言学
大 島 一	ハンガリー語学、社会言語学
小副川 琢	政治学、現代レバノン・シリア研究
坪 井 祐 司	東南アジア史、イギリス領マラヤ史
藤 野 陽 平	宗教人類学、東アジアの地域研究
目 黒 紀 夫	アフリカの野生動物保全、牧畜社会の変容

Field Science Center (FSC)

- * MAJIMA, Ichiro. Prof., West African Anthropology
- * FUKAZAWA, Hideo. Prof., Social Anthropology of the Malagasy Speech Communities in the Indian Ocean
- * KUROKI, Hidemitsu. Prof., Area Studies of the Middle East, Modern History of the Arab East
- * NISHII, Ryoko. Prof., Anthropology of Mainland Southeast Asia
- * ARAKAWA, Shintaro. Assoc. Prof., Tangut Language and its Philology
- * KONDO, Nobuaki. Assoc. Prof., History of Modern Iran
- * OTA, Nobuhiro. Assoc. Prof., History of South Asia
- * SHIOHARA, Asako. Assoc. Prof., Linguistics, Languages in Indonesia
- * TOKORO, Ikuya. Assoc. Prof., Anthropology of South- East Asian Islanders
- * YAMAKOSHI, Yasuhiro. Assoc. Prof. Mongolic Languages
- * KARIYA, Kota. Assist. Prof., West African Area Studies, Islamic Studies
- * ELKINOV, Aftandil. Visiting Prof., Turkic and Persian Literary Culture (2014.4.1～2014.7.31)
- * PANGILINAN, Michael Raymon Manaloto. Visiting Assoc. Prof., Archival Science (2013.10.1～2014.11.31)

* indicates the head (of a research unit) or the director (of IRC/FSC)

Research Associates

Research Associateships are fixed-term positions for junior researchers (post-doctoral level). They are salaried and are responsible for participating in various activities and assisting the research staff in conducting research projects; these activities are a part of the academic training for junior scholars at ILCAA.

Specially Appointed Research Associates

- * ABE, Yuko. Bantu Languages
- * MATSUDA, Kuninori. Indian Mahayana Buddhism
- * NAKAMURA, Kyoko. Japanese Painting
- * UMEKAWA, Michihisa. Area Informatics, Geographical Information Analysis
- * UMETANI, Hiroyuki. Mongolian Language

Project Researchers

- * EBIHARA, Shiho. Descriptive Linguistics, Tibetan Dialects
- * FUJINO, Yohei. Anthropology of Religion, Area Studies (East Asia)
- * MEGURO, Toshio. Wildlife Conservation in Africa, Change in Pastoral Societies
- * OSHIMA, Hajime. Hungarian Linguistics, Sociolinguistics
- * OSOEGAWA, Taku. Political Science, Contemporary Lebanese and Syrian Studies
- * TSUBOI Yuji, Southeast Asian History/History of British Malaya

共同研究

Joint Research



ミャンマー、ヤンゴン 屋外でチェスに興じる人々
People playing chess outside, Yangon, Myanmar
撮影: 澤田英夫
PHOTO: SAWADA, Hideo



基幹研究

基幹研究は、共同利用・共同研究拠点である本研究所の中期的研究戦略の柱として、研究所内で自発的に組織された研究班によって展開される共同研究軸です。2013(平成25)年度から3年計画で以下の課題が基幹研究として活動を行っています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

【中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成】

代表者: 黒木 英充

本基幹研究は、中東から東南アジアまでを含めたイスラーム圏において観察される人間移動と、諸宗教宗派・民族の織りなす社会関係とを連関させて、「多であること」の問題性を追究する。多元的社会的生成過程とイスラーム的ネットワーク拡張の動態、移民・難民の政治社会空間に対する影響、個人・集団のアイデンティティ戦略と政治思想の連関、などの問題に取り組む。本基幹研究は、2005(平成17)～2009(平成21)年度「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の発展形である。バイルート・コタキナバル両海外拠点を管轄するフィールドサイエンス研究企画センターや、MEIS「中東イスラーム研究拠点」と連携しながら、バイルート拠点において共同利用・共同研究課題を国際的規模で推進する。また中東☆イスラーム研究／教育セミナー、バイルート若手研究者報告会や歴史文書セミナーなどを通じて次世代研究者の育成にも当たる。さらに歴史的画像資料などの修復やデジタル化、それを使った研究成果の社会還元を積極的に行う予定である。

【人類学におけるミクロ・マクロ系の連関】

代表者: 西井 涼子

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、トランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティヴへの関心が高まってきた。また他方では、その対極にむかう方向性として、個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフオーダンス、社会空間、個体形成など、ミクロ・パースペクティヴを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。こうした国内外の研究動向をまえに、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究をこえた次元での、新たな概念化と理論化の試みである。本基幹研究は、その点で先導的な役割をになうことを目標とする。具体的には、個人と社会、構造とエージェンシーといった二項対立の構図をこえた地点から、身体や実践の主題をめぐるミクロ領域での研究と、広域におよぶ空間移動や生物進化のダイナミクスまで射程に入れたマクロな時間軸に基づく研究との、接合ないし理論構築にかかわる研究成果の呈示を企図するものである。

Core Research Programs

Core Research Programs represent the current axes of Joint-Research in ILCAA.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/>

Human Mobility and Formation of Plural Societies in the Middle East and the Muslim World

Leader: KUROKI, Hidemitsu

This research program explores the meaning and reality of "plurality" in the societies of the Middle East and the Muslim world by focusing on the historical development of human mobility and the contemporary dynamism of Muslim-Non-Muslim relations. Extending the scope of research from the Middle East to West Africa and South East Asia, we study the following subjects: historical development of the pluralistic composition of societies; networking and moral-constructing functions of Islam; social impact of migration and diaspora; identity strategy and political thoughts and actions. An axis of this program is the international joint research project "Human Mobility and Multi-ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies", which will be conducted at the Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES) in Beirut, Lebanon. Various types of seminars, workshops, and educational programs for post-doc researchers, Ph. D. candidates, and MA students will be held at ILCAA, JaCMES, and Kota Kinabalu Liaison Office. Another objective of our program is to digitalize historical sources such as ancient maps, travelogues, pictures, and periodicals.

The Anthropological Explorations into the Linkage of Micro-Macro Perspectives

Leader: NISHII, Ryoko

Most of field researches in cultural / social anthropology until 1970's were carried out in relatively small and isolated communities. In recent years, however, anthropological themes on macro perspective vary from nation states and "the modern world system" to globalism / transnationalism. On the other hand, subjects on micro perspective such as habitus, affordances, tacit knowledge, intercorporeality and so on which are focused upon an individual's body are becoming increasingly prevalent. Under these theoretical backgrounds, we think that anthropologists must attempt to construct a new anthropological perspective which will be able to encompass the profound dichotomy itself between individual and society, structure and agency. Therefore the main subject of our anthropological core program aims to graft and integrate the macro perspective theory and the micro perspective theory, or to explore the linkage of micro-macro perspectives.

【言語ダイナミクス科学研究】

代表者：中山 俊秀

AA研基幹研究「言語ダイナミクス科学研究」は、①言語多様性の記録のための研究活動 (Language Description & Documentation) の活性化と、②言語運用と変化の実際、言語の多様性の実際を踏まえた、ダイナミックな現象・システムとしての言語の研究 (Linguistic Dynamics Science) の新展開を目的として組織された。具体的には以下のような活動を通して関連研究を先導していく：危機言語を中心とした研究未開発言語の臨地研究の推進、記述研究を支える方法論開発と共同研究インフラの整備、言語運用の実際を基盤とした理論研究枠組みの再構築、言語の構造的多様性の幅と深さ、およびその多様性に見られる規則性の研究、言語構造の形成・変化に見られる規則性の探求とそれを形作る動機付けの多面的研究。本研究の第2フェーズ (2013-2015) では、これまでの3年間に築いた言語多様性に関する共同研究体制を維持発展させながらも、第1フェーズ(2010-2012) における研究の進展と近年の社会的要請の変化をふまえ、特に危機言語の記述とドキュメンテーション研究分野での学術成果の社会還元により力を注ぐ。

【アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求】

代表者：深澤 秀夫

基幹研究アフリカ文化班の主たる活動目的は、グローバル化のなかで大きな変容を迫られているアフリカ諸地域の文化を研究するアジア・アフリカ言語文化研究所の人類学・地域研究(歴史学)研究者たちが、各自の研究活動に立脚しつつ、共同で多元的世界像の探求・構築を進めることにある。アフリカ文化班が扱っている具体的な主題には、植民地経験と社会変化、遊牧民/牧畜民と農耕民、人の移動と集団間関係、社会の中の女性/シングルなどがある。本基幹研究メンバー個々人がこのような主題に関する研究を進めると共に、基幹研究班全体として、公開研究会・セミナーの開催、海外研究者との連携によるシンポジウムの開催などを企画・実施し、ウェブサイトなどを通じて広く研究成果の発信を行っている。以上のようなアフリカ文化をめぐる基礎研究は、紛争・難民、政治的民主化、社会的差別など、現代アフリカの抱える諸問題の理解と解決に不可欠であるばかりではなく、それらの問題の根本にある近現代世界の構造そのものを問い直し、多元的な世界像の構築に寄与することを目指している。

Linguistic Dynamics Science Research

Leader: NAKAYAMA, Toshihide

The goal of this program is to advance research on the nature of structural diversity among human languages and on the complex dynamics that shape the linguistic structure. Diversity and dynamics are aspects that have been significantly underestimated, or ignored, in mainstream theoretical linguistic studies. Traditionally, languages have been assumed to share a large part of the basic structure as Universal Grammar. However, a gradually increasing number of descriptive grammars on under-documented languages suggest that structural variation among human language is much deeper and more complex than we ever expected. Language as a system has generally been considered to be autonomous. That is, the properties of the linguistic system are independent of external functional forces, including socio-cultural, historical, and pragmatic forces. Such a view has begun to be questioned recently by linguists researching language change and the use of grammar within discourse. If we take the results of descriptive and usage-based research seriously, we need to reevaluate and reformulate the traditional theoretical framework. This project aspires to build a new, realistic theoretical framework for capturing the nature of human language. This program is run in coordination with the Linguistic Dynamics Science Project 2 (LingDy2).

Pluralistic World Understanding based on African Studies

Leader: FUKAZAWA, Hideo

Historians and anthropologists at ILCAA are trying to grapple with contemporary problems on the African Continent by placing their research within the framework of a longer historical perspective. Research in this core research project is organized so as to promote a pluralistic understanding of the world. The topics include: colonial experiences and social change, migration of people and interrelationship of the groups, women and gender in the societies, etc. The research in the program sets out to question the structure of the modern world itself, in order to enhance our understanding of the historical background to such important current issues in African countries as conflict and refugees, political autocracy, social discrimination, etc. as well as to contribute to the fundamental solution of these problems.





共同利用・共同研究課題

共同利用・共同研究拠点である本研究所にとって、所員が所外の研究者と共同で推進する共同利用・共同研究課題は最も重要な研究事業のひとつです。参加する所外の研究者は、AA研の「共同研究員」として委嘱されます。各研究課題（プロジェクト）は公募を経て、所外の研究者を含む「共同研究専門委員会」によって採択され、また年度ごとに研究成果や公開の状況などに関して評価を受けます。これまで多くの研究課題（プロジェクト）が組織され、約650点におよぶ出版物や、オンライン辞書・データベースなど、多様な研究成果をあげています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/>

以下に示す、2014（平成26）年度に進行中の研究課題は、大きく分野ごとに分けられていますが、多くの研究課題が複数の分野にまたがるテーマを扱っています。

Joint Research Projects

ILCAA Joint Research Projects, conducted by the members of the institute in collaboration with researchers outside the institute, constitute the core of research activities at ILCAA as the International Research Center. Members of all projects who are not regular staff at ILCAA are all given an affiliation with ILCAA as Joint Researchers. The Joint Research Projects are evaluated annually by the Advisory Committee for Research Collaboration, which includes researchers within and outside ILCAA. Projects are evaluated in terms of all of their activities, including their output, publications of the results, and their overall academic significance. Research results of Joint Research Projects in the past include about 650 publications and on-line dictionaries and databases that are available for use by any researchers and the general public.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/jrp/>

Ongoing Projects in 2014 are categorized into three groups as follows; however, many of them are interdisciplinary in nature.

言語学系

【アフリカ諸語のイベントの統合のパターンに関する研究】

2012～2014年度 参加研究者数18名

代表者：河内 一博（防衛大学校）

このプロジェクトは、アフリカのすべての大語族を網羅し、手話も研究対象に含め、各言語が、空間移動、状態変化、アスペクトなどの意味領域において、イベントの諸要素を統合して形態統語的に表すのにどのような特徴が見られるかという問題を扱う。ほとんどのアフリカの言語は複数の動詞からなる構文を持つが、これらの構文の形態統語的な比較も意味的な比較も体系的になされていない。世界の他の地域の言語とも比較をすることによって、アフリカの各言語・語族が全体的にどのような類型的なタイプに分類されるかを分析し、そしてアフリカの言語に特徴的な現象はあるかどうかを考える。さらに、違う意味領域間の表現パターンの一貫性が各言語・語族内で見られるかどうかを調べる。

Linguistics

Studies on Event Integration Patterns in African Languages

Project term: April, 2012–March, 2015; Number of participants: 18
Coordinator: KAWACHI, Kazuhiro (National Defense Academy of Japan)

Covering spoken languages in all the major language phyla in Africa (Niger-Congo, Nilo-Saharan, Afroasiatic, and Khoisan), and including sign languages in Africa in its scope of study, this project investigates how African languages characteristically integrate different types of components of macro-events (complex events) in such semantic domains as motion, state change, and aspect to express them morphosyntactically (Talmy 1985, 1991, 2000), and addresses theoretical issues raised by previous studies (e.g., what macro-events are, whether another typological type like the equipollent type exists) and those that we may encounter as our studies advance. Many African languages have been reported to commonly use multi-verb constructions to integrate event components, but no systematic comparison between morphosyntactic or semantic structures of these constructions seems to have been made so far. By comparing not only languages within Africa with each other but also languages in Africa with those in other areas of the world, the project examines how the African languages under study are classified into the typological types and whether there is any property that is characteristically found across African languages. The project further looks at how consistently characteristic patterns of expressing events are found across different semantic domains within each individual language, language family, and phylum.

【準動詞に関する通言語学的研究】

2013～2014年度 参加研究者数19名

代表者：山越 康裕 (AA研)

本研究では、いわゆる非定形動詞、つまり準動詞にかんする以下の問題点について、東アジアの「アルタイ型」の諸言語を中心に、周辺の類型的に異なる形態統語的特徴を有する言語の事例も含めて考察する。(1) 主節述語と非主節述語が形式上区別されない、もしくはそもそも「節」の認定が難しい言語において、動詞の屈折をどう扱うか。(2) 準動詞の多機能性をどのように記述するか。(3) 動詞性の程度による準動詞と派生形式の区別は可能か。(4) 品詞分類、とくに形容詞の性質とに相関関係はあるか。これらの問題点について、フィールドワークによる一次資料に基づき諸言語のデータを分析・考察し、準動詞の多様性と通言語的特徴について一定の結論を提示することをめざす。

Cross-linguistic Research on "Verbals"

Project term: April, 2013– March, 2015; Number of participants :19
Coordinator: YAMAKOSHI, Yasuhiro (ILCAA)

This project investigates the "verbals" (i.e. non-finite verbs) of various languages, especially of the Altaic-type (the agglutinating languages mainly spoken in middle, inner, and east Asia), and other languages that have different morphosyntactic features. In traditional grammar, verbal inflections are divided into two classes: finite and non-finite. Such a classification is suitable for describing the grammar of Indo-European languages. Therefore, many grammars of other languages such as Altaic-type languages are also described using this classification (finite / non-finite). However, this classification sometimes seems unsuitable for other languages. For example, in the Hateruma dialect of Yaeyama Ryukyuan, the same inflectional form can be used as the predicate, of both the main and subordinate clauses. In Hateruma, enclitics decide the functions of verbs. Therefore, we cannot define both the finite and non-finite forms in this language. This phenomenon does not seem to be a rare case. We consider the following four points: (1) how to describe the verbal inflection of languages that makes no distinction between the predicates of the main and subordinate clauses, (2) how to analyze the diversity of the functions of verbals, (3) (especially with regard to participles) how to distinguish between derivation (derivational nominalization) and inflection (inflectional nominalization), and (4) what the relationship is between the characteristics of adjectives and the functions of verbals. We aim to clarify the above points and suggest the diversity and cross-linguistic features of verbals using the primary data that individual co-researchers collected through their fieldwork.

【複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性】

2013～2015年度 参加研究者数20名

代表者：中山 俊秀 (AA研)

従来の言語研究においては、文法は実際の言語使用から独立した自己完結した体系をなすという前提のもと文法の分析・理論化がなされてきた。しかし、近年の研究の中で、言語使用が文法知識に影響を与えることがさまざまな角度から論証されるようになり、言語システムと言語使用を切り離すことの正当性が強く問われている。本共同利用・共同研究課題では、局所的「例外」パターン、個人間・文脈間でのパターンのユレ、文法構造から説明できないパターン、歴史的変化に見られるパターンなど従来の文法研究で扱いにくい、実際の言語使用や変化に見られる規則性・パターンをも言語の動的な本質の一部として統合的に捉えることが出来る新たな言語記述・研究枠組みの構築を目指す。

Investigation into the Possibilities and Implications of a Usage-based Approach to Grammar

Project term: April, 2013– March, 2016; Number of participants :20
Coordinator: NAKAYAMA, Toshihide (ILCAA)

This project aims to build a new descriptive and theoretical research framework that effectively captures the dynamicity of linguistic system. In traditional descriptive and theoretical linguistic research, linguistic system (grammar) as a system of knowledge has been assumed to be independent of how language is used in actual discourse. As a result, grammar has been analyzed and modeled without paying much attention to the reality of language use. Recently, however, studies especially those in the area of language change show that language use in fact shapes grammatical patterns (supposedly a reflection of grammatical knowledge), and validity of separating linguistic system from language use has been questioned. In spoken discourse, the choice of linguistic forms is affected not only by their grammatical makeup but also by pragmatic and interactional factors. The patterns and regularities observed there do not necessarily follow expectations held in traditional research: the patterns and regularities in spoken discourse are commonly much smaller scale or fragmentary; and spoken discourse contains patterns that cannot be explained on the basis of grammatical structure. In this project, we will explore an alternative research framework that can account for the synchronic patterns and the dynamic aspects of linguistic structure as an integral whole.



【日本語のノダに類する文末談話標識の通言語的研究:「思考プロセス」の観点からのアプローチ】

2013~2015年度 参加研究者数9名

代表者:角田 三枝(立正大学)

日本語のノダ文については多くの研究がある。角田(2004)は「思考プロセス」という原理を提唱した。これは、話者がある現象を見た時に、「1.認識、2.疑問、3.推察、4.答え」を経て思考が展開し、「4.答え」の所でノダ文が現れるというものである。また、「思考プロセス」は何度も繰り返すことができる。この原理を用い、単文、複文、談話におけるノダ文の機能を統一的に論じた。本共同研究は「思考プロセス」を応用し、アジアのいくつかの言語のノダ文に相当する文の機能の解明と、新たな談話理論の構築を目指す。「ノダの思考プロセス」が他の言語にもあてはまれば、普遍的な原理と考えられる。言語によって、意味が進展するつながり方の違いなども観察し、今後の意味の進展も、予測できるかもしれない。

A Crosslinguistic Study of Nominalizer-final Constructions: The 'Cogitation Process' Approach

Project term: April, 2013–March, 2016; Number of participants : 9
Coordinator: TSUNODA, Mie (Rissho University)

The Japanese language contains a construction that has the following structure: [Clause] Nominalizer Copula. The nominalizer slot is occupied by the nominalizer =no, and the copula slot by =da. This construction is known as 'the =no=da construction', and has a wide range of uses. Mie Tsunoda (2004) proposed a model called the cogitation process model to account for the varied uses of the =no=da construction. According to this model, when a person observes a situation, that person goes through the following four phases and utters the =no=da construction at Phase 4. Phase 1: Recognition of a situation. Phase 2: Question about the situation. Phase 3: Conjecturing an answer. Phase 4: Finding the answer. In a stretch of discourse, that person may go through the four phases for the second time, and even for the third time. That is, the four phases may be repeated cyclically. This model provides a systematic and coherent account of this construction's various uses, such as in simplex sentences, complex sentences, and discourse. A nominalizer-final construction, which resembles the Japanese =no=da construction, occurs in several languages of Asia, such as Amdo Tibetan, Burmese, Central Tibetan, Korean, Mongolian, Newar, and Sibe. In these languages, the nominalizer-final construction is acknowledged, but its uses have not been sufficiently investigated. The present project mainly aims (i) to investigate the functions of this construction in these languages, and, (ii) to furnish contributions to general linguistics, particularly to discourse study.

【通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造】

2013~2015年度 参加研究者数20名

代表者:内海 敦子(明星大学)

本研究の第一の目的は、通言語的な情報構造に関する事象および分析方法や理論のもとに、オーストロネシア諸語の情報構造を分析し、それによって他の様々な統語的事象を説明することである。これに際し、日本語や英語など、研究の進んでいる言語における情報構造の専門家を交え、分析に使用する術語およびアプローチについて全員の同意を得る。第二に、オーストロネシア諸語の中で、情報構造が与える現象をタイプ分けする。定・不定の区別、あるいは新情報・旧情報の区別が統語的事象にどのような影響を与えるかを、各言語の担当者が分析し、報告する。第三に、他の諸言語とオーストロネシア諸語を比較し、普遍的な点と特異な点を明らかにする。第四に、近隣の諸語との言語接触の影響が見られるかどうかを考察する。

Cross-linguistic Perspective on the Information Structure of the Austronesian Languages

Project term: April, 2013–March, 2016; Number of participants :20
Coordinator: UTSUMI, Atsuko (Meisei University)

This project uses a theoretical model to clarify the interaction between information structure (pragmatics) and grammar in Austronesian Languages from a cross-linguistic point of view. The interaction among languages may vary, so the co-researchers are required to indicate the kinds of interaction found within each language. These will be categorized into several types, after which the types that are frequently observed within Austronesian languages will be determined. In addition, the patterns of interaction in non-Austronesian languages will also be discussed. Moreover, we compare the interactions found in Austronesian languages and those frequently occurring in non-Austronesian languages to distinguish typologically universal phenomena from specifically Austronesian ones. Furthermore, the influence of language contact on the interaction between pragmatics and syntax in Austronesian languages will be examined.



【"人間—家畜—環境をめぐるミクロ連環系の科学"の構築—青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ】

2014～2016年度 参加研究者数8名

代表者：星 泉 (AA研)

現在、チベット高原における牧畜業は、政府による定住化政策の推進と経営合理化の波にさらされることで、従来の生態的生業形態の変更を余儀なくされている。本共同研究では、言語学・人類学・宗教学・生態学・文学など、多分野にまたがる研究体制のもとで、牧畜に関係する語彙収集を通じて、青海チベットの牧畜民が家畜との緻密な関係のもとで作り上げてきたミクロな生活の知恵に接近する。そしてその成果を「牧畜語彙小辞典」という形で集約・刊行することで、マクロ・レベルの草原生態学との相互補完的な関係を持つミクロ・レベルの生活知に関する資料を整備するとともに、牧畜業の将来的再生をにらみ、現地社会への貢献を目指す。

【インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築】

2014～2016年度 参加研究者数22名

代表者：塩原 朝子 (AA研)

インドネシアを中心とする東南アジア島嶼部はその豊かな言語的・文化的多様性によって知られているが、同時にそこで話されている少数言語の中には急速に話者を減らしているものが多く、早い段階での言語ドキュメンテーションが急務となっている。本課題では国内外の専門家、現地の専門家、現地語の話者が集まり言語ドキュメンテーション、アーカイビング、データ利用の手法を共有するためのネットワークを構築するとともに、言語ドキュメンテーションを進めるための実効的な活動を行う。具体的な活動としては、現地の研究機関における言語ドキュメンテーションの手法に関するセミナーの開催および、言語データの加工・蓄積・公開を目的とした現地話者コミュニティとの共同作業を予定している。

【朝鮮語アクセント・イントネーション研究】

2014～2016年度 参加研究者数8名

代表者：伊藤 智ゆき (AA研)

15-16世紀に朝鮮半島で話されていた中期朝鮮語は、弁別的アクセントを有していた。現代韓国語ソウル方言を含む多くの方言では、この弁別的アクセントが失われているが、韓国南東部の慶尚道方言や北朝鮮北部の咸鏡道方言、中国吉林省の延辺朝鮮語などには、中期朝鮮語と類似する弁別的アクセントが今なお保存されている。本研究プロジェクトでは、中期朝鮮語及び朝鮮語諸方言を対象に、アクセント・イントネーションの音韻論的・音声学的分析を進める。研究内容としては、基本的なアクセント体系の分析、複合語アクセント、中期朝鮮語との規則的対応率と例外の原因、借用語アクセント、世代差、方言間比較、フォーカスとイントネーションパターン分析等が含まれる。

Assessing Micro Level Linkages between Humans, Livestock, and the Environment in Amdo, Tibet: The Outgrowth of the Compilation of an Ethnographic Dictionary of Nomadic Vocabulary

Project term: April, 2014–March, 2017; Number of participants : 8
Coordinator: HOSHI, Izumi (ILCAA)

Nowadays, the nomadic pastoral lifestyle on the Tibetan High Plateau is facing the huge impact of “sedentarization” and “rationalization” by the national policy of the Chinese central government. In this joint research, we will approach the micro-life knowledge of the nomadic herders in the Amdo (Qinghai) Tibet region through nomadic vocabulary collection using multidisciplinary research, such as linguistics, anthropology, religious studies, ecology, and literature. By summarizing the results of our research into a compact dictionary, we will build a mutually complementary analysis about the macro level of grassland ecology and also contribute local society in expectation of future restoration of pastoral life in this region.

Constructing a Research Network for Documenting Minority Languages in and around Indonesia

Project term: April, 2014–March, 2017; Number of participants : 22
Coordinator: SHIOHARA, Asako (ILCAA)

The area in and around Indonesia is well-known for its linguistic and cultural variety. But many languages spoken there are seeing drastic reductions in speaker numbers, as communities shift to the national language Bahasa Indonesia or to a more dominant regional language. It is therefore urgently necessary to document regional and minority languages in order to preserve linguistic and cultural information that is precious to speech communities and their descendants, as well as to linguists and other researchers. This project will build a network between speakers of minority languages, local scholars and researchers, and foreign researchers, encouraging them to engage in collaborative work on collecting, editing, storing, and publishing substantial documentation of minority languages. Seminars and training sessions on the theory and practice of language documentation will be held at local universities and research institutes, with the aim of increasing awareness and the skills necessary for work on language documentation and revitalization.

A Study of the Accent and Intonation of Korean Dialects

Project term: April, 2014–March, 2017; Number of participants : 8
Coordinator: ITO, Chiyuki (ILCAA)

Middle Korean (15-16th c.) had a distinctive pitch accent. Many contemporary Korean dialects including Seoul have lost this distinctive accent; however, it has still been preserved in some dialects spoken in peripheral areas of the Korean peninsula: Kyengsang (South Korea), Hamkyeng (North Korea), Yanbian (north-eastern China), etc. In this project, we investigate the accent and intonation of these contemporary dialects as well as Middle Korean in detail. Based on the collected data, we will conduct joint research on the phonological/phonetic properties of the Korean prosodies. The topics we will work on include: identification of the basic accent system and tonal alternation rules; compound accent; regular correspondence rates with Middle Korean accent and the cause for exceptions; correlation between accent distribution and lexical class; loanword accentuation; generational differences; variation and analogical change; comparative studies of various dialects; reconstruction of a Proto-Korean accent; focus and intonation patterns; acoustic analysis of F0 tracings and peak delay, and the effect of segments on the phonetic realization of each accent class.



■ 人類学系

【思考様式および実践としての現代科学とローカルな諸社会との節合の在り方】

2012～2014年度 参加研究者数17名

代表者：春日 直樹（一橋大学）

本プロジェクトでは、科学技術に関する専門的な知識を備えた人類学者が、哲学及び自然科学の第一線の研究者と共に、具体的な事例を詳細に議論し、思考及び実践の様式という点から、ローカルなコミュニティにおける人々の生活と節合する現代の科学の在り方を考察する。それによって、1) 思考様式としての科学、2) 実践としての科学、3) 領域化された科学、について明らかにし、推論システムとして専門化された個々の分野について特性と可能性を検討していく。

【地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求】

2012～2014年度 参加研究者数17名

代表者：高倉 浩樹（東北大学）

本企画では、「アフリカ」「中東」などの地域名を掲げた地域民族誌研究を事例としてふりかえりつつ、人文学・社会科学における民族誌的知見の位置づけを解明するとともに、人類学の可能性を探求しようとするものである。様々な地域でのフィールドの現場における民族誌的事実を理解するために必要な空間的構想力のあり方を支える方法論や視座がどのようなものかを言語化する。具体的には、各地域に特徴的な議論、研究の手法を紹介しながら地域民族誌の研究史をたどり、当該地域をどのように概念化してきたのか、そこで内包されていた前提や視座を明示する。その上で地域民族誌と地域研究における方法論の共通性と相違に着目したうえで、日本の人類学における地域民族誌の特徴を解明する。

【人類社会の進化史的基盤研究(3)】

2012～2014年度 参加研究者数24名

代表者：河合 香吏（AA研）

本共同研究課題は人類社会をその進化史的基盤という視座から捉えることをめざしておこなわれてきた長期的な共同研究の第3期にあたり、霊長類学、生態人類学、社会文化人類学という3学問分野を柱として、これに倫理学の専門家を加えたメンバーで構成される。この長期共同研究はこれまで「集団」および「制度」をテーマとしてきたが、本共同研究課題はテーマを「他者」と設定し、これまでの共同研究で明らかになったこと、すなわち、人類はさまざまな集団をなし、さまざまな制度を備えた複雑で多様な社会に生きていることに対し、そうした社会において「他者」はどのような存在として個に顕れ、対峙し、関係するののかといった側面から、人類の社会と社会性の進化に関する議論を深化、展開する。

■ Anthropology

The Modes of Articulation of Local Societies to Contemporary Science as Ways of Thought and Practice

Project term: April, 2012–March, 2015; Number of participants: 17
Coordinator: KASUGA, Naoki (Hitotsubashi University)

No anthropologist denies the present-day importance of science; however, those who discuss science have seldom been willing to avail themselves of the significant achievements of anthropological research on ways of thought. In this project, anthropologists with expertise in research on science and technology will work with leading researchers in philosophy and natural science to bring attention to specific cases for in-depth discussion, and explore the modes of articulation of contemporary science as it applies to the lives of people in local communities in terms of ways of thought and practice.

Regional Ethnography and Anthropological Spatial Conceptualization: Inquiry of Methodological Potential

Project term: April, 2012–March, 2015; Number of participants: 17
Coordinator: TAKAKURA, Hiroki (Tohoku University)

This project rethinks the role and possibility of ethnographic information and ethnography itself in the humanities and social sciences. In addition, it explores the potential of anthropological inquiry in Japan. Anthropologists have regional interests related to the site of their fieldwork, such as "Africa" or the "Middle-East", as well as the theoretical questions. Although theoretical inquiries can be shared with all anthropologists, regional questions are usually shared only with those concerned with a particular region. This project focuses on the concept and methodology that have developed in a particular regional ethnography. Taking account of the research history of each regional ethnography, we will define the role and effect of the information and knowledge provided by the regional ethnography. The members of this project consist of anthropologists who work in different regions of the world.

Human Society in Evolutionary Perspectives (3)

Project term: April, 2012–March, 2015; Number of participants: 24
Coordinator: KAWAI, Kaori (ILCAA)

This joint research project aims to take a view of human society over a long term from an evolutionary historical perspective. Hence, using the three academic disciplines of primatology, ecological and social / cultural anthropologies as a base, this joint research project comprises the work of experts in fields such as social philosophy and ethics. The first phase of this long-term joint research project focused on the theme of 'groups', which was conducted between 2005 and 2008. The second phase, undertaken between 2009 and 2011, focused on the theme of 'institutions'. This pattern of changing themes continues as the research progresses, and the theme established for the third phase is 'others'. The results of the first and second research phases show that human beings establish a wide variety of groups, and that they live in complex and multifarious societies equipped with a wide variety of institutions. This joint research project offers an inverse perspective on the evolution of human society and its sociality, thus far, by examining the nature of the existence of 'others' and how they appear, relate and confront one another.

【現代アフリカにおける〈国家的なもの〉に関する研究：ニューメディア・グローバル化・民主主義】

2012～2014年度 参加研究者数19名

代表者：内藤 直樹（徳島大学）

本課題は、現代アフリカとその周辺地域における国家の再編にかかわる諸問題を検討することを通じて、グローバル化のなかで展開する新たな国家や市民社会の可能性について構想する。そのために次の3つの領域におけるアクター間の交渉や葛藤に関する民族誌を比較検討する。①携帯電話やインターネットなどのニューメディアの導入・利用・普及、②移民・難民による経済活動およびイスラム金融や中国経済の台頭といった国家や地域を越えたグローバルな経済活動、③国際社会や国際NGOがつよく関与する民主化運動や先住民運動。本共同研究は、これら現代アフリカの国家再編にかかわる民族誌を比較検討することで、アフリカという地域で育まれてきた社会や文化に根ざした新たな地域像の可能性を提出するとともに、国民国家という枠組の再編過程を総合的に解明する方途を探索する。

【インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間】

2014～2016年度 参加研究者数9名

代表者：宮原 暁（大阪大学）

本研究では、東南アジアの女性の経験世界—中国系の女性と中国系の男性と通婚する女性が、いかに異なる仕方でも移民社会の再生産に関与するか—を現地調査にもとづいて明らかにすることで、東南アジアの華僑華人史の書き換えを試みるとともに、人口と空間をめぐる政治力学という観点から既存の華僑華人研究、および移民研究の枠組みを再考する。また女性たちの移動、定住、通婚、再生産の経験の蓄積のなかに「人の移動」ととらえる新たな人類学的枠組みを模索する。

【「もの」の人類学的研究(2) (人間／非人間のダイナミクス)】

2014～2016年度 参加研究者数19名

代表者：床呂 郁哉（AA研）

本研究課題は各地における人間と非人間の「もの」の関係の諸相と、その関係の構築における広義の技術に焦点を当て、新たな視点から人類学的に検討することを主な目的としている。これまで「もの」と人間関係を考察する際には、ともすると近代西欧的な世界観に捉われがちであった。とくにデカルト以降の近代西欧的な認識においては、人間だけがエージェンシーを備えた主体として特権化され、逆に非人間の「もの」は死せる客体としてテクノロジーを通じて一方的に統御される対象であるという理解が通念的には流布している。これに対して本研究課題では、世界各地における各種の非人間の「もの」との関係の諸相や、人間が「もの」と関わる多様な技術・技法の具体的な諸相を明らかにすることを通じて、通念的に流布している人間中心主義的な世界観や認識論を超えて、人間と「もの」の関係性を新たな視点から比較検討していくことを目的としている。

Study of Nationhood in Contemporary Africa: New Media, Globalization, and Democracy

Project term: April, 2012 – March, Number of participants : 19

Coordinator: NAITO, Naoki (The University of Tokushima) 2015;

This project considers the possibilities for African states and civil societies by examining issues related to state formation or reformation in Africa and surrounding areas. The project will focus primarily on three domains related to state crises and (re)formation: 1) the rise of new media such as mobile phones and the Internet; 2) the influence of the global economy and transnational economic activities; and 3) political or social movements such as democratization and indigenous movements. The project will compare ethnographic data related to the above-mentioned domains and consider the diverse nature of the nation-state in the context of globalization.

Anthropological Reflections on Population Movements: Focusing on Women's Experiences as an Interface in the "Diasporic Space" around Southeast Asian "Chinese Communities."

Project term: April, 2014 – March, 2017; Number of participants : 9

Coordinator: MIYAHARA, Gyo (Osaka University)

In this research project, we examine women's experiences around male migration in the scope of "Diasporic Space," in which population movements can be interpreted politically. This project will examine the invention and negotiation of identity and physical body, and the space where the incarnation is processed. Through these analyses, we will discuss the post-colonial view on Chinese migrants between settlements and movements, then, Sinicization and Creolization.

The Anthropological Study of Things(2) (Dynamics of Human/Non-human things)

Project term: April, 2014 – March, 2017; Number of participants : 19

Coordinator: TOKORO, Ikuya (ILCAA)

This study project is the second part of the previous study project named, "The Anthropological Study of Things" in ILCAA during 2006-2009. The previous project studied the relationship between human beings and non-human things (e.g. artifacts, artificial objects, natural things, animals etc.) in different socio-cultural settings in world. In the second part of this project, we continue our anthropological (ethnographical study) on various aspects between human beings and non-human things and the study's implications for culture, society and technology.



■ 歴史学・地域研究系

【前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討】

2012～2014年度 参加研究者数22名

代表者：太田 信宏 (AA研)

本課題は、イギリス植民地支配期以前の南アジアにおいて、さまざまな中間的社会的集団がそれぞれの政治、経済、社会的文脈のなかでどのように発展し、いかなる役割を担っていたのかを検討する。前近代南アジアでは「カースト」や村落、村落連合（「地域共同体」）、都市、商人仲間、教団・宗派などが一定の自律性・自立性をもって存在していた。これら諸集団間の闘争と折衝の過程、さらには諸集団と支配権力の間のそれに着目して、南アジアの歴史的展開を捉え直す。本課題では、固い枠組みをもつとされる社会的集団（「カースト」など）だけではなく、雑多な諸集団を取り上げ、それらを支えた内的結合の多様なあり方を、集団間の比較も行いつつ明らかにする。

【中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存(第2期)】

2013～2015年度 参加研究者数17名

代表者：黒木 英充 (AA研)

本研究は2010-2012年度に実施した同名の課題の第2期研究で、中東の6都市（バイルート、アレppo、エルサレム、カイロ、イスタンブル、テヘラン）における人間移動の実相と都市空間の拡大・変容を分析し、多民族・多宗派関係がどのように形成されてきたか、そしてそれが近現代の政治・社会運動にどのような影響を与えてきたかを明らかにすることを目指す。第2期は多層ベースマップシステムを使って、都市とその後背地ならびにより広域の関連地域を対象とした時間軸も考慮した多層空間に、移動とエスニシティを位置づけることを目標とする。研究会はバイルートの中東研究日本センターとAA研とで交互に行うことを予定している。

【ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容】

2013～2015年度 参加研究者数11名

代表者：菅原 由美 (大阪大学)

これまでジャワの宗教に関する議論は「前イスラーム」的要素を強調したジャワのイスラーム受容の様相に説明の力点が置かれてきた。しかし、ジャワのテキストの歴史は9世紀にまで遡り、「前イスラーム」と一括りに説明するにはあまりに長い歴史の変遷を経ている。本研究は、ジャワ語（古ジャワ語及び現代ジャワ語）文書を通時的に比較・対照することにより、9～19世紀のジャワにおいて、外来宗教がどのように解釈され、変容してきたかを明らかにすることを目的とする。この目的を達成するために、19世紀以降出版されてきたジャワ語のローマ字翻字テキストをデジタル化し、コンコーダンスを作成し、これを利用して、テキストに表れる宗教概念やその変遷に関する分析をおこなうとともに、ジャワの言語・文化の変容過程全般に関する研究の基盤を構築する。これと平行して、研究基盤を活用する国際的な研究ネットワークの形成を図るとともに、海外ですでに構築されているマレー語文献研究基盤との連携により、マレー社会における宗教の変容過程との比較を試みる。

■ History / Area Studies

Reconsidering Intermediate Social Groups in Premodern South Asia

Project term: April, 2012 – March, 2015; Number of participants: 22
Coordinator: OTA, Nobuhiro (ILCAA)

This project aims at reconsidering the roles and functions of various intermediate groups in South Asia during the pre-colonial period. It investigates how these groups were formed and developed in their respective historical contexts. It has been pointed out that in premodern South Asia there were various intermediate social groups enjoying a certain degree of autonomy and independence, such as villages, unions of villages («regional communities»), cities, merchant associations, religious orders or cults, and «castes». By paying special attention to the conflicts and negotiations among the groups and between these groups and their states, the project aims to arrive at a new understanding of the historical development of South Asian society. It examines various types of social groups of premodern South Asia and seeks to reveal the diversity in the forms of societal ties underlying their formation and integration by making comparative studies of different groups.

Human Mobility and Multi-ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies (the second term)

Project term: April, 2013 – March, 2016; Number of participants: 17
Coordinator: KUROI, Hidemitsu (ILCAA)

This study, the second phase of the study of the same title conducted from 2010 to 2012, analyses the reality of human mobility and the expansion and transformation of urban spaces in six Middle-Eastern cities: Beirut, Aleppo, Jerusalem, Cairo, Istanbul, and Tehran, to reveal how multi-ethnic and multi-religious relations have formed and how these relations have affected modern political and social movements in the region. The objective of the second phase is to understand mobility and ethnicity in relation to multi-layered time and space encompassing cities, their backlands, and wider relevant areas, using the multi-layered basemap system. The Japan Center for Eastern Studies in Beirut and the Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) will take turns hosting seminars.

Transformation of Religions as Reflected in Javanese Texts

Project term: April, 2013 – March, 2016; Number of participants: 11
Coordinator: SUGAHARA, Yumi (Osaka University)

This project clarifies how foreign religions such as Hinduism, Buddhism, and Islam have been interpreted and transformed in Java from the 9th to 19th century by comparing and analyzing Javanese (old and modern Javanese) texts. First, we will compile a concordance of the Javanese texts that have been transcribed and published for academic purposes since the 19th century. Then, we will identify and analyze diachronic changes in these religions' concepts in Java as well as related changes in the Javanese language and culture as expressed in these Javanese texts. Concurrently, we aim to create an international academic network for Javanese text research, by compiling the intended concordance through cooperation with researchers throughout the world.

【歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化(2)】

2013～2015年度 参加研究者数17名

代表者：石川 博樹 (AA研)

サハラ以南アフリカ諸国の経済停滞が国際的な懸案となっている現在、大多数の国々の基幹産業である農業についての研究を一層深化させることが国際的に求められている。これまで我が国におけるサハラ以南アフリカ農業研究は、主に農学、人類学、経済学の研究者によって実施され多くの成果をあげてきた。本研究課題においては、これらの学問分野の研究者に歴史学研究者も加わり、サハラ以南アフリカ諸地域の農業と文化の関連について歴史的観点からの研究を共同で実施する。特に社会的・文化的に重要な役割を果たしてきたにもかかわらず未解明の課題が少なくない主食作物に関わる史的諸問題を広範に検討することによって、サハラ以南アフリカ農業研究の新たな研究領域の開拓を試みる。

【イスラームに基づく経済活動・行為】

2013～2015年度 参加研究者数12名

代表者：福島 康博 (AA研フェロー)

本研究課題は、イスラーム金融やハラール産業、ムスリム女性のファッション、巡礼やイスラーム・ツーリズムなど、イスラームに基づく産業における経済活動、および六信五行の実践やシャリーアに則った生産・分配・消費というムスリムの経済行為に注目し、複数のディシプリンから多角的な分析を通じて、これらの現象の現代的な意味と意義を明らかにすることを目的とする。研究対象地域としては、中東・北アフリカ、東南アジア、南アジア、中央アジアなどである。人類学、地域研究、経済学などのディシプリンをもった研究員が、共同研究を通じて、各地で観察されるイスラームに関連する経済活動・行為の実態の解明を行っていく。

【新出多言語資料からみた敦煌の社会】

2014～2016年度 参加研究者数10名

代表者：松井 太 (弘前大学)

世界有数の仏教聖地である敦煌は、中国本土の西端に位置するとともに、北アジア・中央アジア諸地域の交流の焦点であった。そのことは、敦煌地域発現の多言語（漢語・チベット語・西夏語・古代ウイグル語・モンゴル語など）の文献資料からも示される。近年の中国における敦煌研究の急激な発展に伴い、漢文資料の分析は大いに進められたが、非漢語資料をも併せ分析して敦煌社会の多文化性に着目する視点はむしろ後退している。本研究課題では、各種の諸言語に通じた若手研究者が共同して、世界各国に所蔵される敦煌発現の未公開写本資料あるいは敦煌石窟現地に遺存する銘文資料を語横断的・通時代的・包括的に比較検討し、敦煌社会における言語・文化交流の実像を解明することを目的とする。

Study on the Relationship between Agriculture and Culture in Sub-Saharan Africa from Historical Perspectives (2)

Project term: April, 2013–March, 2016; Number of participants: 17
Coordinator: ISHIKAWA, Hiroki (ILCAA)

With the economic depression of Sub-Saharan Africa becoming an international crisis, the need for greater expertise in agriculture, which is a key industry in most of the region, becomes urgent. In Japan, a great deal of effort has been made by researchers of agriculture, anthropology, and agricultural economics to study the agriculture of Sub-Saharan Africa and they have obtained good results in the last few decades. In this project, researchers of the above-mentioned disciplines and historians will jointly examine the relation between agriculture and culture in Sub-Saharan Africa from historical perspectives. The goal of this project is to explore a new field of study on agriculture in Sub-Saharan Africa by emphasizing subjects related to staple food crops. There remain numerous unsettled historical questions about these crops although they have had an important role socially and culturally in Sub-Saharan African societies.

Economic Activities and Behaviors Based on Islam

Project term: April, 2013–March, 2016; Number of participants: 12
Coordinator: FUKUSHIMA, Yasuhiro (ILCAA Research Fellow)

This project intends to clarify the contemporary meaning and significance of economic activities by Shari'ah compliant industries and Muslims' economic behaviors such as production, distribution, and consumption of products and services provided by these industries, through multidisciplinary research and analysis by the researchers who study Islamic countries. This project deals with 1) macro-level economic activities based on Islam, that is, Shari'ah compliant industries like Islamic finance, Halal food and cosmetics industry, fashion industry (abaya, hijab, jilbab, tudung, etc), pilgrimage (hajj, umrah, ziyarah) and tourism (Muslim-friendly hotel), and 2) micro-level economic behaviors based on Islam, that is, Muslims' production, distribution, and consumption affected by Shari'ah, especially five pillars and six articles of faith. The study region of this project includes to not only Middle East, North Africa, South, Southeast and Central Asia, but also Europe, North and South America. The joint research of researchers in this project, whose academic backgrounds are cultural anthropology, area studies, and economics, intends to investigate economic activities and behaviors based on Islam in / around Muslim world.

The Society in Dunhuang based on the studies of multilingual sources newly discovered

Project term: April, 2014–March, 2017; Number of participants: 10
Coordinator: MATSUI, Dai (Hirotsuki University)

Dunhuang, which is now an oasis city in Gansu Province of modern China, was also the westernmost terminal of so-called China Proper. The society of Dunhuang was composed not only of the Chinese, but also of peoples of various linguistic origin, i.e. Indic, Iranian, Turkic, Mongolic, Tibetan, Tangut, etc. This project compares textual analysis using multilingual materials discovered at the Dunhuang Caves and reconsiders the linguistic and cultural exchanges in the social history of Dunhuang. This research will concentrate mainly on unpublished texts in holding institutes in Europe and China, and on the wall inscriptions in the Dunhuang Caves. The joint researchers will present papers on text materials in each language from linguistic, philological, and historical viewpoints. Furthermore, through discussion on each presentation, the researchers will obtain a comprehensive understanding on the multilingual sources from Dunhuang, as a step to understanding the integrated reconstruction of cultural exchange in the history of Dunhuang society.



【里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究(2)】

2014～2016年度 参加研究者数15名

代表者: 陶安 あんど(AA研)

「里耶秦簡」と「西北漢簡」とは、地方官庁で作成・使用された文書や帳簿を主たる内容とする共通性を示しつつ、秦・漢の変革を跨るという時代的特性を持つ簡牘史料である。本研究は、「新簡牘分類理論」という本研究特有の研究手法によりこの二つの史料群の正確な解説と比較研究を横断領域的に進め、伝世文献によって映し出されている「秦漢時代」の連続性を打破して、秦・漢王朝の継承と変革の実態を明らかにする。具体的には、本研究は、毎月二回程度、年間二十四回程度史料の輪読会を開催し、輪読による新知見を「史料ノート」として随時HPに公表し、他の専門家と交流しつつこの史料ノートの集積を中心に里耶秦簡の訳注を作成・公表する予定である。また、新史料の講読を通じて、我々の方法論の有効性を実証しつつその理論化を図る。研究課題の三年目には、AA研の言語研修の場を借りて簡牘セミナーを開催し、若手研究者に研究課題の成果を伝授することに努める。

【近世イスラーム国家と周辺世界】

2014～2016年度 参加研究者数23名

代表者: 近藤 信彰(AA研)

歴史的に多元的な社会を保持してきたイスラーム圏は、16-18世紀において、オスマン朝・サファヴィー朝・ムガル朝という大帝国によって統治された。「柔らかな専制」などともよばれるその統治体制は、この地域に一定の平和と繁栄をもたらした。世界史的には、未だにヨーロッパ勢力の世界進出の影として扱われがちな、これらの帝国の統治体制とそれらを取り巻く世界との関係を、文書史料等の原史料に基づいて比較検討し、その特質を明らかにするのが、本課題の目的である。年3回程度の研究会を開催し、さまざまな史料に基づく研究成果を共有し、その総合化を図る。また、扱われる原史料のなかでは、特にオスマン文書史料を重視し、年1回のオスマン文書セミナーを開催する。また、予算が許せば、研究者を招聘し、国際ワークショップ等を開催する。成果は、共同研究員が執筆する論集のほか、史料校訂・翻訳などの出版によって、公開する。

The new boundary-crossing approach on Ancient Chinese Slip and Tablet Documents (2): Change and Duration in the Qin and Han as seen through a Comparison of Wooden Tablets from the Qin site of Liye and North-west Border Area of Han

Project term: April, 2014– March, 2017; Number of participants: 15
Coordinator: HAFNER (SUEYASU), Arnd Helmut (ILCAA)

Wood and Bamboo slips and tablets used to be more than mere carriers for written texts in ancient China. They were commodities with specific shapes fitting specific functions. For instance, small nicks on tally sticks (“Fu”) or tokens (“Quan”) carried encoded information, similar to IC-chips on Credit cards today. As Credit cards and other labeled articles of our daily social life are not made for writing purposes, neither were Wood and Bamboo slips and tablets in ancient China. As self-evident it may sound, they fulfilled manifold social functions. During their long life circle – beginning from creation and primary application and reaching to a multiplicity of secondary applications – they witnessed a wide range of the social life of Ancient China. This project attempts to revive these precious witnesses of Ancient society by taking into account the variety of non-textual information carried by Wood and Bamboo slips and tablets, without, of course, neglecting the organic connection between their social functions and the characters written on them. In this project, specialists of research fields as different as archeology, paleography, history, and law come together and share their expertise in search for a new boundary-crossing approach to these authentic eyewitnesses of Ancient Chinese society.

Early Modern Islamic States and the Surrounding World

Project term: April, 2014– March, 2017; Number of participants: 23
Coordinator: KONDO, Nobuaki (ILCAA)

The Ottomans, the Safavids, and the Mughals were three early modern Islamic empires that ruled over vast regions for more than 200 years. These empires had a standing army with firearms and a well-organized bureaucracy. The ruling system of the empires was supported by multi-ethnic people. These empires brought peace to the Mediterranean region, West Asia and South Asia for a long time. This project focuses on the relationship between these three empires and the surrounding world. Although there are many scholars of world history, and an increasing number of new researchers, most studies still focus on European exploration to Asia and America and were mainly based on the documents from the East Indian Companies. Also, researchers of these three empires have a tendency to focus on one specific empire for their research. The project takes all these three empires and neighboring regions into consideration. The comparison of three empires and the neighboring regions' images of the empires are the main focus of this project. Philological studies of non-Western sources such as Ottoman and Persian sources are important for this project. Three meetings will be held each year to discuss aspects of the relationship between the empires and the neighboring regions. The researchers will have a seminar on Ottoman Archival sources and publish not only a collection of papers but also text editions and translations of the Islamic sources.

【シティズンシップと政治参加 ―移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究―】

2014～2016年度 参加研究者数15名

代表者：錦田 愛子 (AA研)

越境移動を日常とする人々の存在は20世紀のグローバル化以降増大し、さまざまな法的地位や目的をもち、制度を利用しながら移動を続ける多様な形態がみられる。本課題ではそうした人々を移民／難民と呼び、彼らの存在が国家とその社会福祉政策、またコミュニティに与える影響を考察する。居住地域における生活環境や、社会福祉の状態に対して、移民／難民はどのように参画し、意思決定にどのように影響を与え得るのか。この問いに対して、ただ移民政策という国家の視点から捉えるのではなく、移民／難民自身が地域社会でもちうるシティズンシップという視点から捉えることで、より多面的な分析を試みる。

【東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)】

2014～2016年度 参加研究者数24名

代表者：富沢 寿勇(静岡県立大学)

本プロジェクトは複数の分野(人類学、歴史学、政治学、宗教学等)の研究者によって東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関して共同研究を進めていくことを目的とする。今期は非ムスリム集団とムスリムとの関係性の多様性に関しても視野を広げて研究の深化を図るとともに、中東などを専門とする研究者らもメンバーに加えることで、地域間比較の観点から東南アジアにおけるムスリム／非ムスリムの関係性の特質なども検討する。研究の進め方として、AA研の海外拠点コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)を中心としてこれまでに構築してきた東南アジアの研究者とのネットワークを活用しながら国際的な共同研究として実施していく。

【アフリカに関する史的研究と資料】

2014～2016年度 参加研究者数10名

代表者：苅谷 康太(AA研)

日本のアフリカ研究において、資料の分析に基づく実証的な歴史研究は、人類学を始めとした他の学問領域に比べて立ち遅れてきたと言える。しかし、このことは、翻って考えると、資料群に関する基礎的な情報の蓄積及び研究者間での共有、既知の資料の再検討、これまで十分に顧みられてこなかった資料の精査、文字資料と非文字資料の双方を踏まえた方法論の吟味などによって、日本におけるアフリカ史研究が、今後、大きく進展し得ることを意味している。そこで、そうした進展に寄与するための基礎研究として、本課題では、アフリカ及びアフリカと歴史的に関係を有してきた諸地域に関する資料群の種類、量、内容などを包括的に検討すると同時に、それらの資料を礎としたアフリカ史叙述の方法論を考察する。

Citizenship and Political Participation: Comparative Study of the Influence of Migrants and Refugees on Community Development and Social Welfare

Project term: April, 2014– March, 2017; Number of participants : 15
Coordinator: NISHIKIDA, Aiko (ILCAA)

Many more people migrate crossing borders in the 20th century and they have different types of legal statuses and purposes of movement. They take advantage of different kinds of travel documents and regulations of states for further travels. In this project, we call those people “migrants-refugees” and investigate their influence on the community development and social welfare of the host countries. This is the research project based on the achievement from the former term “Citizenship for Migrants and Refugees: A Comparative Study of Institutions and Practices of Inclusion and Exclusion from Nation-States,” and investigate with specific focus on the political participation of migrants-refugees. How do they commit to social environment surrounding them, and to what extent their existence can affect the social welfare of their residential countries? In order to answer these questions, the study focuses not only on the immigration policy of each country, but also on roles of citizenship as membership of the local communities, and tries multi-dimensional analysis about the issue.

Multi-disciplinary Study on Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (The Second Term)

Project term: April, 2014– March, 2017; Number of participants : 24
Coordinator: TOMIZAWA, Hisao (University of Shizuoka)

The general outline of this study project is to conduct comparative field research on the nature of ethnic relations between Muslims and Non-Muslims in various Southeast Asian countries. To this purpose, the research project would invite researchers from different disciplinary backgrounds such as Anthropology, History, Political Science, and Islamic Studies to contribute to the study. Our team will organize various workshops and/or conferences in the Kota Kinabalu Liaison Office (KKLO) in Malaysia, an international research office of ILCAA.

A Study of Sources for African History

Project term: April, 2014– March, 2017; Number of participants : 10
Coordinator: KARIYA, Kota (ILCAA)

The field of African historical studies has witnessed remarkable progress in recent years resulting from cooperation among multiple disciplines, including history, anthropology, archaeology, linguistics, and area studies. There is still plenty of ground to cover, however, in the examination of sources, one of the most important foundations of historical studies. More progress can be achieved through collaborative efforts such as a comprehensive accumulation of information about historical documents, information sharing among researchers, reexamination of well-known writings, new investigation of sources that have not been sufficiently considered, and the examination of methodologies of historiography. In this joint research project, therefore, we comprehensively examine the kinds, quantities, and contents of sources for historical studies on North, West, East, and Southern Africa and the surrounding areas that have historically had relationships with Africa. In addition, to consider how a more detailed and precise African history can be written, we examine methodologies that cover not only written sources such as European, Arabic, and Ajami documents, but also unwritten sources such as oral traditions.



研究連携ネットワーク

本研究所は、広くアジア・アフリカの言語学・歴史学・人類学・地域研究の研究を行う研究者・次世代研究者のネットワークの中核になっています。/ 組織や国の垣根を越えた共同研究を進めるとともに、より広い視野でネットワークを形成・維持するため、主に次のような活動に取り組んでいます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/jp/about/network/>

Collaboration Network

ILCAA acts as a network center for active researchers and next generation scholars studying the linguistics, history, anthropology, and area studies of Asia and Africa.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/about/network/>



海外学術調査総括班(OSC)

海外学術調査総括班は、AA研所員が培ってきた人文社会系フィールドワークの諸経験をふまえて、フィールドサイエンスの構築可能性の探究と超域的研究ネットワークの確立をめざす事業です。

1975(昭和50)年以来、人文社会系・理工系・医学系・農学系・生命科学系など、さまざまな分野で海外学術調査にたずさわる研究者・研究組織間、そして、研究者・研究組織と文部科学省や日本学術振興会との間の情報交換や連絡調整に従事してきました。2005(平成17)年度からは、事務局をAA研フィールドサイエンス研究企画センター内に置き、活動内容のさらなる拡充につとめています。

本事業の主な活動は次の2つです。

1. 海外学術調査の研究組織の代表者を中心に、広く全国の研究者を集めた「海外学術調査フォーラム」の開催
2. フィールドサイエンスの構築可能性をさぐる多彩な企画の継続的な開催・運営

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/osc/>

The Overseas Scientific Research Coordination Team (OSC)

Since 1975, the OSC has been engaged in establishing cooperative relationships, both among concerned researchers and institutions conducting overseas scientific research, and between researchers and MEXT, and also JSPS. The head office of OSC is in FSC, and the ILCAA staff member have been coordinating its activities together with researchers and academics from various institutions.

OSC is organizing an annual “Overseas Scientific Research Forum”, where around 100 researchers from all over Japan meet at ILCAA to exchange information about their academic areas of study.

OSC also organizes workshops on field sciences.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/osc/>



Fieldnet

Fieldnetは、アジア・アフリカ言語文化研究所が運営する、世界各地でフィールドワークを行う研究者のための研究ネットワークです。フィールドに入るための情報、あるいはフィールドで得られた情報をFieldnetのウェブサイト上の地域情報のページで公開したり、Fieldnetのソーシャル・ネットワーク・サービスで他の研究者と共有したりすることができます。また、若手研究者が企画するフィールドネット・ラウンジをFieldnetを通じた公募で開催し、その結果、毎年、多くの優れたワークショップ、シンポジウムが開かれています。活動を通じて、文系・理系、分野や地域を越えた新たなフィールドサイエンスの構築を目指しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/fieldnet/>

Fieldnet

We are a network of scholars who frequently conduct field research abroad. Our aim is to promote field research by creating a fellowship through online and offline activities. We are based at FSC. Through Fieldnet, you can obtain useful information about fieldwork abroad and the technicalities involved, for example, the research permits, how to collect data from the Colonial Era, counterparts and co-researchers, and resource persons. Further, you can interact with scholars from various fields, who will provide you with new ideas and a multidisciplinary perspective in your own research. Thus, you can organize new research groups and become active in pioneering fields in order to resolve academic and social problems.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/fieldnet/>

Fieldling

Fieldling フィールド言語学コミュニティ

AA研は、Fieldlingという若手記述言語研究者のコミュニティを支えています。このコミュニティは所属研究室の枠を越えた交流・協力を促進する目的で2005(平成17)年にAA研を拠点として活動を開始しました。フィールド言語学の様々な分野に関して、フィールドリングのメンバーから寄せられる意見・要望に応える形で幅広い内容にわたって研究支援企画を実施しています。このように、FieldlingはAA研が若手研究者コミュニティにおけるニーズによりよく応えるための仕組みとして機能しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/fieldling/>

Fieldling: Building a Community of Field Linguists

“Fieldling” is a research project that aims to create a collaborative framework, a ‘community’, for junior researchers who are scattered throughout Japan but are actively involved in descriptive linguistics through their original linguistic field work.

Since its inception in 2005, Fieldling has hosted numerous conferences and workshops.

Fieldling now has the basis of its operation within the Linguistic Dynamics Science Project 2. (LingDy2)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/training/fieldling/>

学術交流協定

海外の研究機関と協定を結び、研究資料・情報の交換、研究者の相互交流、共同研究・調査等の国際的学術交流を推進しています。

Academic Cooperation Agreements

ILCAA enters into agreements with overseas institutes, and promotes international academic exchange such as those of materials, information, and researchers, and promotes joint investigation.

友の会

これまでにAA研に所属した研究者との関係を維持し、国際的なネットワークを形成することを目的として「友の会」を設置しています。

ILCAA-Affiliated Scholars

“ILCAA-Affiliated Scholars” are a group of scholars who have been affiliated with ILCAA in one capacity or another. Members include past research staff, visiting professors, research associates, fellows, and junior fellows.

地域研究コンソーシアム(JCAS)

「地域研究コンソーシアム」は、地域研究に関わる全国の組織のネットワーク形成を目指している、アカデミック・コミュニティに立脚した新しい型の組織連携です。AA研は、2004(平成16)年のJCAS設立に拠点組織の1つとして貢献し、現在も幹事組織として参画しています。フィールドサイエンス研究企画センターが連携活動の窓口となっています。

<http://www.jcas.jp/>

The Japan Consortium for Area Studies (JCAS)

JCAS was established in 2004, with the aim of forming a network of research institutions engaged in area studies in Japan. ILCAA contributed to the founding of JCAS and has been one of its organizing institutions. FSC functions as the gateway to JCAS network.

<http://www.jcas.jp/en/>





既形成拠点

Established Academic Institutions



アジア書字コーパス拠点(GICAS)

GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって2001(平成13)～2005(平成17)年度の5年度にわたり補助金を得て形成されてきた「COE研究拠点」の1つです。GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築してきました。各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体现であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的リファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つことを目指すものです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/gicas/>

Grammatological Informatics based on Corpora of Asian Scripts (GICAS)

GICAS is one of the "COE" (Centers of Excellence) academic institutions funded by the Grant-in-Aid for Scientific Research (Priority Areas Research) of the MEXT. GICAS was built in 5 years, from 2001 to 2005, with an approximate total budget of 500 million yen. "Grammatological Informatics" is a new academic branch, which concentrates on giving a well-founded scientific basis for the research of "scripts and characters" (quite rich and abundant, especially in Asia) of the human language through their re-evaluation as an infrastructure of the communication. GICAS builds the Corpora of Canons, royal manuscripts, as well as other linguistic sources, that is "Corpora of Asian Scripts" which reflect the long academic tradition of thoughts and contemplations on "scripts and characters" in Asia and the history of their usage. Only through the verification through this Corpora implemented by the utmost advanced techniques of information processing, emerges the new academic sphere of "Grammatological Informatics" which is well - founded and promotes the practical applications of its outcomes. GICAS will be an internationally accessible reference center of scripts and characters, which enable Japan to continue to play a conducting role in the study of Asian scripts. GICAS became an autonomous COE institution since 2006 after a five-year grant-in-aid by MEXT. It undertakes the task of offering a new paradigm of grammatological informatics as well as upbuilding the result of the projects so far.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/gicas/>



中東イスラーム研究拠点(MEIS)

MEIS「中東イスラーム研究拠点」は、本研究所在2005(平成17)年度から2009(平成21)年度まで文部科学省特別教育研究経費(拠点形成)を得て実施した「中東イスラーム研究教育プロジェクト」(The Research and Educational Project for Middle East and Islamic Studies)を通じて形成された中東およびイスラームの研究拠点です。この拠点の前身となった中東イスラーム研究教育プロジェクトは、2006(平成18)年2月にレバノンのバイルート拠点「中東研究日本センター(JaCMES)」、2008(平成20)年3月にはマレーシアのコタキナバル拠点「コタキナバル・リエゾンオフィス」を開設し、それぞれの運営にあたる一方、中東・イスラームに関する複数の共同研究を展開し、国内外の研究者を招いた不定期の研究会やシンポジウムと合わせて、日本における中東研究、イスラーム研究の全国的な発展や国際的展開に寄与してきました。また、全国の大学院生や博士課程満期修了者を対象とした中東・イスラーム研究セミナー、同教育セミナーおよびアラビア語、ペルシア語、ジャワ語の文献学・文書学セミナー、さらには若手のみならず全国の研究者すべてを対象としたオスマン文書セミナーなどを通して、次世代を担う若手研究者の育成にも努力してきました。2010(平成22)年4月に発足した本研究拠点は、同時にスタートした基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」や、中東研究日本センター、コタキナバル・リエゾンオフィスの維持・運営にあたっているフィールドサイエンス研究企画センターと密接に連携・協力しながら、わが国の中東研究、イスラーム研究のさらなる振興・発展を目指しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/meis/>

Middle East and Islamic Studies (MEIS)

MEIS was established in 2010 as an autonomous academic institution to take over the 5-year large-scale project "Research and Educational Project for Middle East and Islamic Studies" (the former MEIS), which was carried out from 2005 through 2009 academic years. The former MEIS project was supported by special research fund of Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and was engaged in following activities. 1. Setting up and managing two overseas satellite offices: Japan Center for Middle East Studies (JaCMES) in Beirut, Lebanon and Kota Kinabaru Liaison Office in Saba, Malaysia; 2. Joint research projects on the Middle East and/or Islam; 3. Seminars on the Middle East and Islamic Studies for students of postgraduate and post-doctoral level. In addition to the above mentioned regular program activities, occasional seminars, symposia, and conferences were held on various topics, such as seminars on the Arabic, Ottoman, Persian and Javanese historical manuscripts. These activities contributed to advance and train the researchers of younger generation. MEIS is designed to continue its contribution to the developments of Middle Eastern and Islamic Studies at both national and international level, in conjunction with the newly born Core Research Program "Human Mobility and Formation of Plural Societies in the Middle East and the Muslim World", and Field Science Center (FSC), which runs two overseas satellite offices after 2010.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/meis/>



研究資源

Research Resources

エチオピア、アクスム、バスケット・マーケット

Basket Market, Aksum, Ethiopia

撮影：石川博樹

PHOTO: ISHIKAWA, Hiroki

39

AA
ILCAA 4th
1964-2014



アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源

IRC プロジェクト

「アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流の推進」というIRC（情報資源利用研究センター）の設置目的に合致した研究を本研究所内で毎年度募集し、審査を経て「IRCプロジェクト」として採択しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/organization/irc/>

オンライン研究資源

AA研の共同研究や、スタッフ個人の研究の成果として、デジタル化された辞書・データベースなどのコンテンツをオンラインで公開しています。これは、AA研が国内外の研究者向けに研究資料や成果を公開することを目的としているものです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/on-line/>

資料展示(企画展・オンライン展示等)

AA研スタッフが収集したアジア・アフリカの言語と文化に関する貴重な資料や、それらの資料をもとに行われた研究の成果を広く一般に公開するために企画展を実施しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/event/exhibitions/>

出版物

本研究所では、査読付きの学術誌、共同研究および個人研究によるさまざまな成果、そして、言語研修や辞典編纂などの事業の成果を数多く出版して公開しています。研究機関あるいは研究者の方々には多くのものを無償で頒布しています。

『アジア・アフリカ言語文化研究』Journal of Asian and African Studies(年2回発行):国内外で高い評価を得ているAA研発行の国際学術雑誌です。所外の研究者を含む編集専門委員会(p.15)が編集に携わり、国内および海外から投稿され査読を経た、言語学・歴史学・文化人類学に関する高水準の論文を掲載しています。

『アジア・アフリカの言語と言語学』Asian and African Languages and Linguistics(年1回発行):アジア・アフリカ諸言語の記述研究の成果を発信するために2006(平成18)年に創刊された査読付き学術雑誌です。一次データに基盤を置いた研究成果の共有により言語の構造的多様性を明らかにし、その記述と理論両面に貢献することを目的としています。

NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia(年2回発行):AA研とインドネシア アトマ・ジャヤ大学言語文化センターとの共同編集により刊行している国際学術雑誌です。インドネシア周辺の言語に関する学術論文を掲載しています。

「アジア・アフリカ言語文化叢書」:AA研を代表する成果シリーズです。所内外の研究者によるアジア・アフリカの言語文化についての論考を査読を経て出版しています。

Information Resources on Languages and Cultures of Asia and Africa

IRC Projects

The Information Resources Center (IRC) promotes and supports the digitization and compilation of various information resources of the languages and cultures of Asia and Africa. Through an annual review process IRC adopts projects of such nature submitted by the ILCAA staff. IRC also provides support for digitization and publicizing of the results of various activities of the Institute, such as the Intensive Language Courses.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/about/organization/irc/>

On-line Resources

Results of ILCAA's Joint Research Projects and those by the research staff include online dictionaries and databases; they are available on the Institute's website for shared use by researchers outside of the Institute and also for the general public.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/on-line/>

Public Exhibitions

ILCAA occasionally holds special exhibitions for the general public, to display the Institute's collection of rare materials on the languages and cultures of Asia and Africa, and also the results of research on such materials.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/event/exhibitions/>

Publications

ILCAA publishes peer-reviewed journals, results of joint research projects and of individual researches, results of dictionary-compiling projects, and materials developed for Intensive Language Courses. Most of the publications are distributed gratis to academic institutions and researchers.

Journal of Asian and African Studies: a biannually published, peer-reviewed journal on linguistics, history, and cultural anthropology. The submitted papers, from both within Japan and abroad, are reviewed by the editorial committee of the journal that includes researchers within and outside the Institute.

Asian and African Languages and Linguistics(AALL): an annual refereed linguistic journal first issued in 2006. In principle, it deals with descriptive studies on minority languages in Asia and Africa, based on the original data mainly obtained by the author's own fieldworks.

NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia: a biannually published, peer-reviewed journal. This is the product of a joint cooperation agreement between the PKBB (Centre for Culture and Language Studies) of Atma Jaya Catholic University of Indonesia in Jakarta, Indonesia, and ILCAA.

Study of Languages and Cultures of Asia and Africa Monograph Series: the volumes of the series are representative of research results of ILCAA.

「地域・文化研究」: AA研が主催する共同研究の研究報告が中心となっています。

「言語研修テキスト」: AA研で毎年行われる言語研修で用いるために、担当講師が独自に作成したテキストです。

「アジア・アフリカ基礎語彙集」: 基礎的な語彙集から辞書まで、多岐にわたるフィールド語彙調査の成果を査読を経て出版しています。

『フィールドプラス』(年2回発行): 2009(平成21)年に創刊された雑誌です。AA研スタッフ・共同研究員を始め、人文科学以外の研究者も執筆陣に迎え、世界のあらゆる場所をフィールド(調査地)とする研究者たちの新しい発想・取り組みやその過程で得られた経験を、様々な角度から紹介します。

<http://www.aa.tufts.ac.jp/ja/publications/>

Area and Cultural Studies: mainly includes the outcomes of Joint-research projects of ILCAA.

Language Course Materials: the textbooks and materials developed for Intensive Language Courses, all developed originally by the instructors for each course.

Asian and African Lexicon: the results of field research by the staff and affiliated researchers of ILCAA. The content varies from basic word lists to extensive dictionaries.

Field+ (Field Plus): a magazine of ILCAA first published in 2009.

<http://www.aa.tufts.ac.jp/en/publications/>

文献資料コレクション

本研究所は、1964(昭和39)年の創設以来、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究にとって重要な資料を収集してきました。現在、資料総数は、図書約14万冊、雑誌約1,800タイトル、マイクロフィルム約1万2千リール、マイクロフィッシュ7万シートに達し、ほかにデジタル化された古文書、地図、写真、ビデオや、CD-ROM等も所蔵しています。

AA研のみがもつ貴重な資料も少なくありません。たとえば、カンボジア語版南伝大蔵経は、戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所蔵本をもとに複製版がつくられ、カンボジアの文化教育機関や寺院に寄贈されて、彼の地の文化復興に貢献しました。また、浅井恵倫旧蔵資料は、台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート等の貴重資料を多数含みます。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン『エジプト誌』(第2版)、19世紀「カイロ石版画集」コレクション、19世紀末からのイランの主要新聞65種、19世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、満洲国駐タイ公使館文書、日本の植民地官僚で京城帝国大学総長を務めた篠田治策の文書など、貴重な資料が所蔵されています。三浦周行旧蔵品を含む朝鮮王朝古文書類コレクションや、清代公文書コレクションは、現在も継続して収集を続けています。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫としては、山本謙吾(満洲語研究)、小林高四郎(モンゴル史研究)、前嶋信次(イスラーム研究)、王育徳(台湾語・文化研究)諸氏の蔵書があります。

なお、故大塚和夫氏の人類学と中東・イスラーム関係の蔵書も大塚文庫としてすでに一部が公開されています。

<http://www.aa.tufts.ac.jp/ja/projects/library/>

Library

The Institute Library has been making every effort since its establishment in 1964 to collect materials and basic data indispensable for the study and research of languages and cultures of Asia and Africa. As of now, library holdings total 140,000 volumes, 1,800 titles of journals, 12,000 reels of microfilm, 70,000 sheets of microfiche, and other digitized materials (documents, maps, photographs, videos).

The library has holdings of several rare and hard to find materials. Among the other remarkable resources are: the Khmer script version of the Tripitaka (the Buddhist sacred texts); a valuable collection by the late Prof. Erin Asai (1895-1969) including land contract documents, videos, photographs, lexicon, linguistic material, fieldnotes on the indigenous people of Taiwan; a collection of theatrical posters in Ottoman period; *Description de l'Egypte ou Recueil des observations et des recherches*, 2nd ed.; Views in Cairo, a collection of lithographs depicting Cairo in 19th century by Robert Hay; 65 Iranian newspapers issued from the late 19th century to 1970; back numbers of the monthly Bengali literary journals published during the 19th and 20th centuries; a set of pictures depicting sugar manufacture during the Qing period; picture book of people in Taiwan illustrating Taiwan folklore in Qing period; the Mongolian Buddhism Texts of the Qing period; the Mongolian Bible (St. Petersburg, 1819); the Records of the Manzhouguo (Manchukuo) Legation in Thailand; the Papers of Jisaku Shinoda, a Japanese colonial official in the pre-Second World War's Korea; the Korea's Joseon Dynasty documents (ex-Prof. Hiroyuki Miura Collection); Qing Archival Documents.

The Institute Library also houses personal collections of the following prominent linguists and historians: Kengo Yamamoto (Manchu language), Takashi Kobayashi (the Mongolian history), Shinji Maejima (Islamic studies), Ioketek Ong (Taiwanese language and culture). Also, a part of the collection of Kazuo Otsuka (anthropology, Middle Eastern and Islamic studies) is publicized.

<http://www.aa.tufts.ac.jp/en/projects/library/>



音声学実験室

本研究所の音声学実験室は、言語音の基礎研究に関する分析や実験を行うために必要不可欠な設備を備えています。コンピュータスピーチラボ(CSL4500)は、アナログ音声信号を高品質でコンピュータに取り込み、スペクトログラム・フォルマント軌跡・LPC(線形予測符号化)周波数反応・FFT(高速フーリエ変換)パワースペクトル・LTA(長期平均)パワースペクトル・ケプストラム分析・ピッチ曲線分析・エネルギー曲線分析など、さまざまなタイプの分析を行うことができます。波形編集・チャンネル編集・時間編集・振幅編集などの基本的編集機能や、記録・再生機能も有しています。さらに、リアルタイムなスペクトログラフ分析・ピッチ分析を行うための専用ソフトウェアも利用可能です。この機器は、言語学的観点から見た発話音の様々な側面の分析を行うのに適切なものです。

音声学実験室に備えられた音声・言語ライブラリには、所員をはじめとする研究者がフィールド調査を通じて収集した言語音・民話・民族音楽など貴重な録音資料が保管されています。これらフィールド調査の成果である録音ディスク・テープの一部および世界諸言語の録音ディスク・テープは借り出すことができます。実験室にある分析機器・録音機器・メディア変換用機器などのハードウェアとソフトウェアには使用説明書が備えられ、利用者の便を図っています。

音声学実験室内には、防音スタジオが用意されています。スタジオに備えつけられた高性能のソリッドステートデジタル録音機を使用して、話者の発話サンプルの高品位な録音を行い、実験室の機器を用いてそれを分析することができます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/phonetic-lab/>

Phonetics Laboratory

The phonetics laboratory of the Institute, under the supervision of Information Resources Center (IRC), has some basic equipment, such as the Computerized Speech Laboratory (CSL4500), for the analysis of speech sounds. The speech and language library attached to the phonetics laboratory holds important recorded materials on languages, folk tales, and folk music obtained through field studies. Recorded disks and tapes of various languages in the world are available for loan.

A sound-treated recording room forms part of the phonetics laboratory. With the high-end solid-state sound recorders provided in the recording room, high quality live recording of speech samples is possible, for example, of speech of language consultants. Moreover, processing the recordings with the instruments provided in the laboratory is also possible.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/phonetic-lab/>





フィールド言語学ワークショップ

AA研では、研究者養成のための研修事業の一環として、特に大学院生・ポストドクターなどの若手研究者に向けたフィールド言語学に関する様々なワークショップを行っています。これらのワークショップは、特に研究の進んでいない言語のドキュメンテーションと記述に関するもので、日本の大学では通常、授業として行われていないものです。そのような研究者養成の一端を担うことは、AA研の重要な役割のひとつでもあります。

ほとんどのフィールド言語学ワークショップでは、参加者がそれぞれ自分がフィールド調査を通して得た言語データを持参することが求められます。ワークショップの講師が助言するばかりではなく、参加者同士が互いの経験を共有することによって、知見を広め深める場となっています。

フィールド言語学ワークショップには、大きく分けて以下の3つのシリーズがあります。

Documentary Linguistics Workshop

ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院 (SOAS) のHans Rausing Endangered Languages Projectと連携して2008(平成20)年から行われている約1週間の短期集中ワークショップです。言語ドキュメンテーション分野を代表する研究者を講師に迎え、日本の記述言語学分野の若手研究者に言語ドキュメンテーションの理論と実践をレクチャーします。また、レクチャーで得た知識への理解をより深めるため、少人数のグループに分かれてアーカイブの疑似体験や言語学習教材の企画・作成などをテーマとしたプレゼンテーションを行うグループワークの機会も設けています。

文法研究ワークショップ

フィールド調査で得られる生の言語データに基づいた文法現象の分析、文法の記述、通言語的な比較・対照を行う上での諸問題に焦点を当てて企画されるワークショップです。地域的・構造的に多様な言語を実地に調査する研究者が集まり、大学や地域の枠を越えた交流の機会を提供しています。

テクニカル・ワークショップ

フィールド調査で得られた言語データの管理・整備・加工・変換に必要な基本的技術の習得を目指すワークショップです。これまで、パソコンによるデータ処理の基礎知識や、フィールド言語学者がよく使うToolbox, ELAN, Praatなどのソフトウェアの使い方を扱ってきました。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/fieldling-ws/>

Field Linguistics Workshops

ILCAA offers various workshops on “field linguistics”, aimed especially at graduate and post-graduate students and junior scholars. Workshops offered are mostly but not exclusively on documentation and description of underdocumented languages. They are complementary to courses offered at universities in Japan, thereby filling the gaps in the training of young linguists -- an important role of ILCAA.

At most of the Field Linguistics Workshops, participants are required to bring their original data, i.e., data obtained through their original field research. The instructors give guidance, but the participants also learn from each other, through sharing their ideas and experience.

There are three series of workshops under Field Linguistics Workshops:

Documentary Linguistics Workshop

This Workshop aims to provide methodological and technical training in various aspects of language documentation research, including audio/video recording, data analysis, metadata, data management, data mobilization, archiving and research ethics. It also serves the opportunity of group project which deepens the understanding of the knowledge acquired from the lectures. This Workshop series is run in collaboration with the Hans Rausing Endangered Languages Project at SOAS, University of London.

Grammatical Studies Workshops

This workshop series serves as a forum for academic exchange among junior scholars on topics in descriptive and typological linguistic research. It provides junior scholars with unique, invaluable opportunities for exchanging ideas and information with scholars from all around Japan.

Technical Workshops

This workshops series focuses on technical issues of managing and processing linguistic data acquired from fieldwork. So far it has been dealing with the basis of text data processing, and how to use popular linguistic software such as Toolbox, ELAN and Praat.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/training/fieldling-ws/>

中東・イスラーム関連セミナー

中東もしくはイスラーム世界に関心を持ち、調査・研究を進めている大学院生や若手研究者を対象に、最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションの能力を高めることを目的としています。

中東☆イスラーム研究セミナー、中東☆イスラーム教育セミナー

2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が毎年行っている研修事業です。「教育セミナー」は、大学院生を対象に、AA研スタッフと招へい講師による講義、受講生のうち希望者による研究発表から構成されています。中東やイスラームについて専攻する大学院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームを専攻としない院生も受け入れ、基礎的な知識や研究手法の情報提供、受講者の間の討論を通じた交流の場を作っています。

「研究セミナー」は、それよりも高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期(博士課程)および博士論文の準備をしている方々を対象にしています。講義は行わず、長時間の研究発表と徹底した討論の機会を提供します。

なお本事業は、2006(平成18)年度から、東京外国語大学大学院および同大学院と単位互換協定を結んだ大学院に所属する学生の単位履修申請科目となっています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/training/meis/meis-semi/>

オスマン文書セミナー

オスマン朝の文書・帳簿を古文書学・アーカイブズ学的視点から学ぶ演習形式のセミナーです。人間文化研究機構(NIHU)プログラム・イスラーム地域研究東洋文庫拠点との共催で、年に1回、2日間にわたって開催しています。

<http://meis2.aacore.jp/ottoman/>

ベイルート若手研究者報告会

中東☆イスラーム研究セミナー、教育セミナーと同じく、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している事業です。国籍を問わず、日本において中東に関連する人文・社会科学研究(地域研究・歴史学・人類学・イスラーム学など)を専攻している若手研究者の最新の研究成果を、レバノンをはじめとする中東の研究者たちに広く知っていただくとともに、専門家同士の密度の濃い議論の場を提供することを目的としています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/meis/beirut-semi/>

Seminars on Middle East and Islamic Studies

ILCAA runs several seminars for graduate students and young researchers who are interested in and working on Middle East or Islamic studies. The seminars are designed to broaden their knowledge by presenting the latest academic information and strengthen their ability of presentation and discussion.

Seminars on Middle East and Islamic Studies (MEIS) for Students of Postgraduate and Postdoctoral Level

The MEIS Seminars started as a part of the activities of the project MEIS in 2005. The annual seminars aim to provide the latest academic information and also to provide opportunities to improve presentational and discussion skills for students of postgraduate and postdoctoral levels who are interested in the Middle East and / or the Muslim Societies.

The seminars include lectures by researchers from both TUFU and other universities, presentation training for students, and discussions.

Since 2006AY, the graduate students of TUFU as well as of the universities which participate in the credit transfer system with TUFU can take the seminars as courses in their program.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/training/meis/meis-semi/>

Seminar in Ottoman Paleography and Diplomatics

This seminar aims to develop the participants' ability to read Ottoman documents and registers by analyzing examples of manuscript documents from Ottoman archives. It is held for two days, once per year, and is cosponsored by Islamic Area Studies Center at Toyo Bunko (Islamic Area Studies is one of the programs supported by National Institutes for the Humanities).

Beirut Seminar for Young Researchers

The seminar meeting "Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art" is to provide opportunities for young researchers who work in Japan specializing in human and social sciences on the Middle East and Islam to present their studies in Beirut and to discuss extensively with researchers of respective field.

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/training/meis/beirut-semi/>

language: Grammar, Texts, Vocabulary

『言語基礎語彙集』

『ベトナム語－日本語語彙』

Statistical Analysis of Field Data on Colloquial

『研究及其述評』

Radio

Nepalese Societies

the Nineteenth

s-Japanese woordenboek
else vertalingen

s Movements in Asia and

, Myth Making, and Nation
Lebanon from an Ottoman
liltizam to a Nation State

of the Kitai Script

nese Miscellany: Folk
of Taiwan a Century Ago

形態論』

関係史料目録』

ア・アフリカ史

anchu and

spoken Tibetan

間信仰研究文献目録』

es and Regional Divisions in
emen

Feng Dialect of Hakka

における訳語の考察』

culture, and Space: The
ction and Shaping of
al Space in South

ardard Somali

h Grammatical

stème politique
aute Volta)

in and the Han

al Traditions of
nce, China

Tembo I: Tembo-Swahili du
ponais-Français

so Vocabulary

s Historiques des Peuples
eroun Central

s D'Origine des Peuples du
et de L'Ouest du Cameroun

語ソコト方言』

里『文海宝鑑』研究』

otic Languages

hili Tel Qu'il Se

イのムスリム・
ティヴ』

erence" and
Asia

c Materials of Lango

dering the Japanese
Occupation in Burma
5)

s of Poll

ive and Practice in a South
amil Village

との出会いーアジア・アフリ

Modern Vietnamese: Loan Words
from Chinese

Territoriality in African Societies

A Synchronic Phonology of Modern
Colloquial Shanghai

『ラフ族の昔話－ビルマ山地少数民族
の神話・伝説－』

Old Forestry Contracts of the Miao
in Guizhou (1736-1950)

Social Changes and Detective
Novels of Tanzania (Mabadiliko ya
Kijamii Na Riwaya ya Upelelezi
Tanzania)

Egyptian Colloquial Arabic

Socio-Economic Changes in Rural
Bangladesh: A Case Study of
Habashpur Village

Human Beings and Representation
Annotated Indices to the Kokand
Chronicles

『多言語主義再考－多言語状況の比較
研究』

New Trends in Studies on Liao, Jin,
and Xi-Xia

The Tai Dam Chronicle 'Tay Pu Xac'
A Classified Vocabulary of the
Mwenyi Language

『中国語藤縣方言 その音韻と語彙と
テキスト』

Aspects of the Phonology of Amdo
Tibetan: Ndzorge Sæme X'rr
Dialect

Initiation à La Linguistique par Les
Langues du Congo-Kinshasa et
Pays Avoisinants

『金平勉語一分類詞匯集－』

Miscellany of Maroua Fulfulde
(Northern Cameroun)

Colonial Responsibilities:
A Comparative History of
Decolonization

『苗語古音構擬』

A Reference Grammar of Mundari

A Chronicle of the Rasūlid Dynasty
of Yemen

『情動のエスノグラフィー－南タイの村
で感じる＊つながる＊生きる』

The Tay Cultural Area of Laos:
Material Culture, Language, and
Ethnic Groups

Studies in Cameroonian and Zairean
Languages

『大清全書 増補改訂・附満洲語漢語
索引』

Akan Vocabulary

The Indochinese Communist Party
in the Comintern System

The Passive Construction in Swahili

Dialogues in Moroccan Shilha
(Dialects of Anti-Atlas and Ait-
Warain)

Kannada-English Etymological
Dictionary

Choix de documents tibétains
conservés à la Bibliothèque
Nationale IV [corpus syllabique]

『南アジア農村社会の研究』

Texts in the Mantharta Languages:
Western Australia

Issues in Linguistic Structure
Revealed by Descriptive Studies

Linguistic and Anthropological Study
on the Shan Culture Area

Collected Essays on Chinese
Dialects

A Grammar of Kumam: The
interaction between syntax and
pragmatics

『カンボジア研究』

"Kaçem Ali" : Monographie d'un
domaine autogéré de la plaine de
Mitidja (Algérie)

Asia
Aspects of Kikamba Phonology:
Syllabification and the Tone-Syntax
Interface

Anthropology of Time-Affectus,
Nature and Social Space

The Significant Role of the Mon
Version Dharmaśāstra

Genesis of Narrative I

『台湾中央研究院傅斯年圖書館藏彝
文(羅羅文)文書解題』

An Illustrated Record of Traditional
Tools and Implements Used by the
Minority Peoples of Yunnan

『福建漢語方言基礎語彙集』

Islam in
Southeast Asia
Religion and Local Contexts
2009

Analysis of the fan-qie in the Wen-
hai Bao-yun (Ocean of characters)

『世紀転換期における日本・フィリ
ピン関係』

A Study of the Basic Vocabulary
of the Min Dialect in the Tung Shan
Island

Rebellion, Myth Making, and Nation
Building: Lebanon from an Ottoman
Mountain liltizam to a Nation State

A Historical Study on the Partition
of India: Basic Documents

『ネパール語語彙集』

Sibe Vocabulary

Fulfulde Tales of North Cameroon

The South Indian Muslim
Community and the Evolution of the
Jawi Peranakan in Penang up to
1948

Some Economic Changes in Rural
Bangladesh (Re-survey of a Union
in Kushtia)

『新疆ウイグルのパズールと
マザール』

『鮮麗なるアフガニスタン 1841-42
ーイギリス軍中尉ジェームズ・ラッ
トレーの石版画よりー』

A Vocabulary of Luobohe miao

Communities and Social Changes
in Modern South Asia

Iraqw Basic Vocabulary with Swahili
Equivalents

A Classified Vocabulary of the
Matengo Language

『チベット文学の現在 ティメー・
グンデンを深して』

A Sharchok Vocabulary: A
Language Spoken in Eastern
Bhutan

Babad Arung Bondhan: Javanese
Local Historiography

Thailand Yao: Past, Present, and
Future

A Sociolinguistic Study of Persian
in Tehran

Aspects of Arabic Script Cultures
in China

Esquisse vers l'Eloge du Tribalisme

『上海方言語彙集』

Report on Xiang Dialects

Studies on Malaysian Society

『契丹小字新発見資料釋読問題』

A Provisional Classification of
Tagalog Verbs

Golden Quadrangle: History,
Languages, Peoples of the Thai
Cultural Area

『躍動する小生産物』

『閩語東山島方言基礎語彙集』

『ネワール村落の社会構造とその変
化ーカースト社会の変容ー』

『サンバー語語彙集』

Reconstruction of Proto-Miao
Language

『現代に生きるイスラームの婚姻論
ガザーリーの「婚姻作法の書」訳注・
解説』

Analysis of the fan-qie in the Wen-
hai Bao-yun (Ocean of characters)

『世紀転換期における日本・フィリ
ピン関係』

A Study of the Basic Vocabulary
of the Min Dialect in the Tung Shan
Island

Rebellion, Myth Making, and Nation
Building: Lebanon from an Ottoman
Mountain liltizam to a Nation State

A Historical Study on the Partition
of India: Basic Documents

『ネパール語語彙集』

Sibe Vocabulary

Fulfulde Tales of North Cameroon

The South Indian Muslim
Community and the Evolution of the
Jawi Peranakan in Penang up to
1948

Some Economic Changes in Rural
Bangladesh (Re-survey of a Union
in Kushtia)

『新疆ウイグルのパズールと
マザール』

『鮮麗なるアフガニスタン 1841-42
ーイギリス軍中尉ジェームズ・ラッ
トレーの石版画よりー』

A Vocabulary of Luobohe miao

An Anthropological Study of the
Folk Medicine in Malay Village:

Old Tibetan Inscriptions

『四川の伝統文化と生活技術』

Pèlerinage de l'Emâm Rezā: Étude
Socio-économiques

The History and Development of
Tonal Systems and Tone
Alternations in South China

Saugnier, The Slave Trader: French
Slave Trade and African Societies
in the 18th century

Rebellion, Myth Making, and Nation
Building: Lebanon from an Ottoman
Mountain liltizam to a Nation State

A Historical Study on the Partition
of India: Basic Documents

『ネパール語語彙集』

Sibe Vocabulary

Fulfulde Tales of North Cameroon

The South Indian Muslim
Community and the Evolution of the
Jawi Peranakan in Penang up to
1948

Some Economic Changes in Rural
Bangladesh (Re-survey of a Union
in Kushtia)

『新疆ウイグルのパズールと
マザール』

『鮮麗なるアフガニスタン 1841-42
ーイギリス軍中尉ジェームズ・ラッ
トレーの石版画よりー』

A Vocabulary of Luobohe miao

Communities and Social Changes
in Modern South Asia

Iraqw Basic Vocabulary with Swahili
Equivalents

A Classified Vocabulary of the
Matengo Language

『チベット文学の現在 ティメー・
グンデンを深して』

A Sharchok Vocabulary: A
Language Spoken in Eastern
Bhutan

Babad Arung Bondhan: Javanese
Local Historiography

Thailand Yao: Past, Present, and
Future

A Sociolinguistic Study of Persian
in Tehran

Aspects of Arabic Script Cultures
in China

Esquisse vers l'Eloge du Tribalisme

『上海方言語彙集』

Report on Xiang Dialects

Studies on Malaysian Society

『契丹小字新発見資料釋読問題』

A Provisional Classification of
Tagalog Verbs

Golden Quadrangle: History,
Languages, Peoples of the Thai
Cultural Area

『躍動する小生産物』

『閩語東山島方言基礎語彙集』

『ネワール村落の社会構造とその変
化ーカースト社会の変容ー』

『サンバー語語彙集』

Reconstruction of Proto-Miao
Language

『現代に生きるイスラームの婚姻論
ガザーリーの「婚姻作法の書」訳注・
解説』

Analysis of the fan-qie in the Wen-
hai Bao-yun (Ocean of characters)

『世紀転換期における日本・フィリ
ピン関係』

A Study of the Basic Vocabulary
of the Min Dialect in the Tung Shan
Island

Rebellion, Myth Making, and Nation
Building: Lebanon from an Ottoman
Mountain liltizam to a Nation State

A Historical Study on the Partition
of India: Basic Documents

『ネパール語語彙集』

Sibe Vocabulary

Fulfulde Tales of North Cameroon

The South Indian Muslim
Community and the Evolution of the
Jawi Peranakan in Penang up to
1948

Some Economic Changes in Rural
Bangladesh (Re-survey of a Union
in Kushtia)

『新疆ウイグルのパズールと
マザール』

『鮮麗なるアフガニスタン 1841-42
ーイギリス軍中尉ジェームズ・ラッ
トレーの石版画よりー』

A Vocabulary of Luobohe miao

Communities and Social Changes
in Modern South Asia

Iraqw Basic Vocabulary with Swahili
Equivalents

A Classified Vocabulary of the
Matengo Language

『チベット文学の現在 ティメー・
グンデンを深して』

A Sharchok Vocabulary: A
Language Spoken in Eastern
Bhutan

Reader of the Uzbek Language

Peuples et Royaumes du

『マレーシア社会論集』

The Vocabulary of Sasan

『巴賽族土頭方言傳說歌謡集』

『アフリカンス語・日本語』

『社会空間の人類学－マテリ
主体・モダニティ』

Making of Multi-Cultural

Ethnographical Texts in A

『客家語基礎語彙集』

Basic Vocabularies of the
Spoken in Phongxaly

A Computer-
of South-Asia

Nattar and the
Economic Ch
India in the 18

『Arwād 島シ

The Ideology
the Third Islan

『南インド・カーヴェリ河

Health Care in Japan: A S

『スワヒリ語基礎語彙用例

Breakthrough: Southeast

Cambodian Studies

Villages in the Haor-Basin

Folksongs of the Black Ta

Cultures sono

Anthropology

The World of

『二〇世紀(ク
形成－南北ア
アフリカから

Comprehensiv
the Uzbek Lan

Filipinos in Japan and Okin

Introduction to Qiang Ph

『東干語文字の音表化』

Study on the Materials of

『イラン「地方史・誌」刊

KWIC Index to the Sanskri
of Dharmakirti

The Shandong Dialects in
and Fei Counties

Challenges in
Linguistics an
Phonology, M
and Syntax

『湖南省南部中
集録－嘉禾県
分類資料－』

『現代インド・
文学研究』

『タイ族が語る歴史「センパ
統紀」「ウンボン スィーボ

South Asian Community
in East Africa, The United

Study on the Wen-hai Ba
(Ocean of characters)

Nepali Vocabulary

『王育徳文庫目録』

Essentials in Ryukyuan La
Documentation

A KHMER-JAPANESE DI

『チュニジアのナツメヤシ・
社会の変容と基層文化』

Japanese-Mon Dictionary

Vijayanagar Rule in Tanj

『タイ族が語る歴史「センパ
統紀」「ウンボン スィーボ

South Asian Community
in East Africa, The United

Study on the Wen-hai Ba
(Ocean of characters)

Nepali Vocabulary

『王育徳文庫目録』

Essentials in Ryukyuan La
Documentation

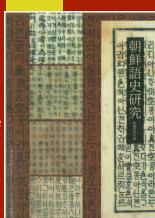
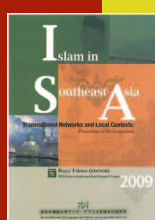
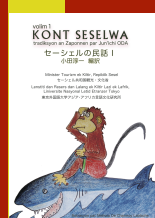
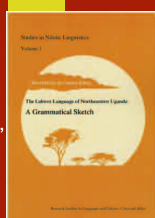
A KHMER-JAPANESE DI

『チュニジアのナツメヤシ・
社会の変容と基層文化』

Japanese-Mon Dictionary

Vijayanagar Rule in Tanj

A part of publications produced by ILCAA





■ロゴマークについて…ラテンアルファベットのAを二つ並べたように見えますが、実はこれはブラーフミー文字の第1字とフェニキア文字の第1字を組み合わせたものです。

2004年度より、「東京外国語大学」は、「国立大学法人」として新しく生まれ変わりました。これにともない、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、「アジア・アフリカ言語文化研究所」の名称ならびに本研究の略称である「AA研」と上のロゴマークの商標登録査定を特許庁に申請し、平成17年8月19日付で商標登録証が発行されました。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL 042-330-5600 FAX 042-330-5610

MAIL ilcaa@aa.tufs.ac.jp

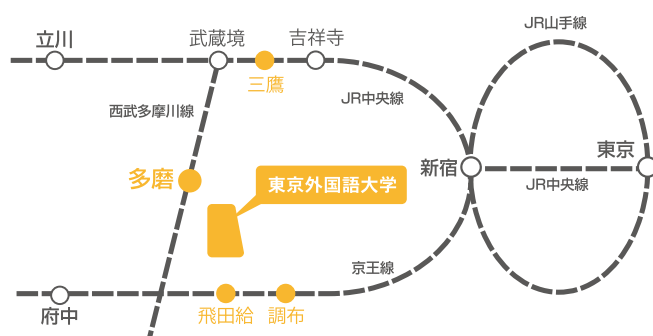
URL http://www.aa.tufs.ac.jp/

●海外研究拠点

・中東研究日本センター (JaCMES)
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura,
Emir Bashir Street, Beirut Central District, LEBANON
Phone/Fax: +961-1-975851
URL: http://meis2.aacore.jp/base_beirut

・コタキナバル・リエゾン・オフィス
Institute for Development Studies (IDS), c/o, IDS lot2-5,
Wisma Setia, Off Jalan Pintas, Pinampang, Kota Kinabalu,
Sabah, Malaysia
Phone: +60-88-246116, 246167, 242871
Fax: +60-88-234707
URL: http://meis2.aacore.jp/base_kotakinabalu

AA研へのアクセス



■JR中央線「武蔵境駅」から西武多摩川線に乗り「多磨駅」で下車
(所要5分)。駅から徒歩5分。 ※西武多摩川線は12分間隔。

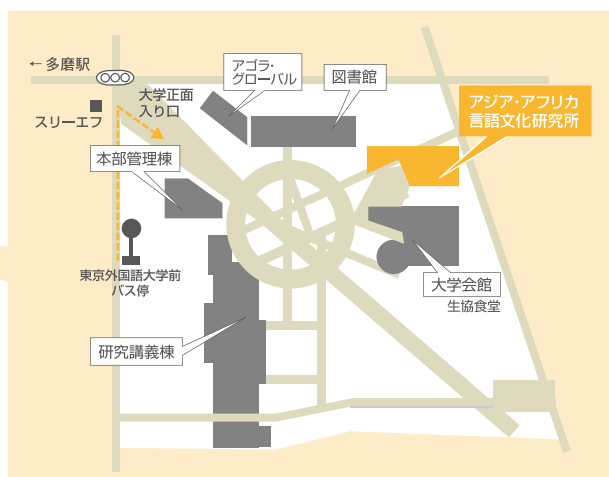
■JR中央線「三鷹駅」から小田急バス鷹52系統に乗り「東京外国語
大学前」で下車(所要30分)。停留所から徒歩2分。

※小田急バス時刻表:

<http://www.odakyubus.co.jp/cgi-bin/search/mapsearch.cgi>

■京王線「飛田給駅」から京王バス飛02系統・調33系統(いずれも
多磨駅行き)に乗り「東京外国語大学前」で下車(所要7分)。
停留所から徒歩2分。

■京王線「調布駅」から京王バス調33系統(多磨駅行き)に乗り
「東京外国語大学前」で下車(所要20分)。停留所から徒歩2分。
※京王バス時刻表:<http://www.bus-navi.com/>



東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所 要覧2014

基礎データ担当要覧編集班
2014年 6月16日 発行



Along with the corporatization of Tokyo University of Foreign Studies in 2004, ILCAA registered the name “アジア・アフリカ言語文化研究所”, which stands for “ajia afurika gengo bunka kenkyuujo”. The logo shown here was also registered on 19 August 2005.

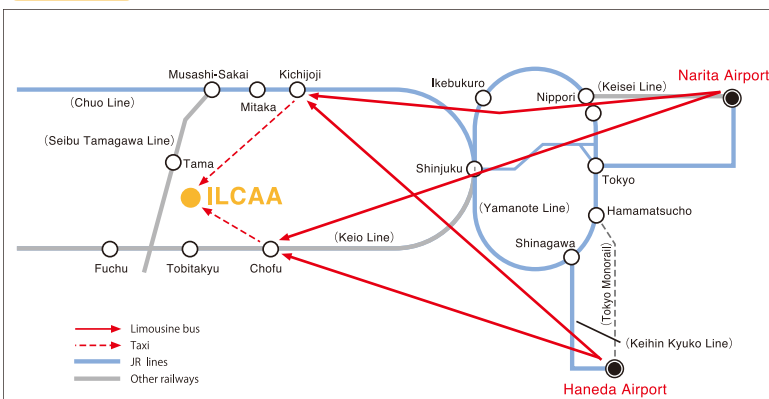
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa Tokyo University of Foreign Studies

ADD 3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan
TEL +81-(0)42-330-5600 **FAX** +81-(0)42-330-5610
MAIL ilcaa@aa.tufs.ac.jp
URL <http://www.aa.tufs.ac.jp/en/>

●Overseas Research Offices

- Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura, Emir Bashir Street, Beirut Central District, LEBANON
Phone/Fax: +961-1-975851
URL: http://meis2.aacore.jp/base_beirut
- Kota Kinabaru Liaison Office, ILCAA-TUFS
Institute for Development Studies(IDS), c/o. IDS lot2-5, Wisma Setia, Off Jalan Pintas, Pinampang, Kota Kinabalu, Sabah, Malaysia
Phone: +60-88-246116, 246167, 242871
Fax: +60-88-234707
URL: http://meis2.aacore.jp/base_kotakinabalu

Access

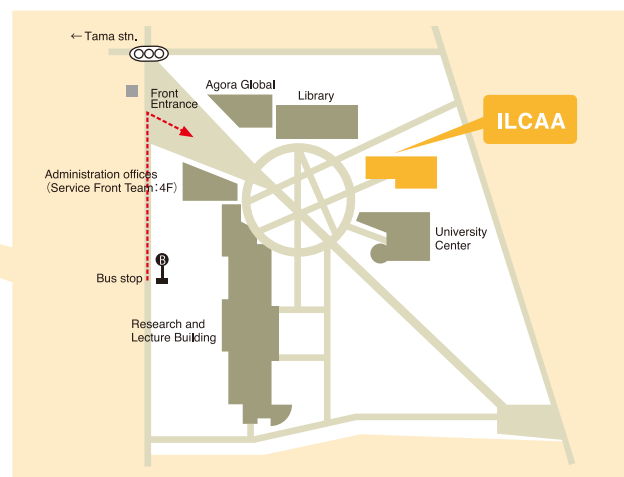
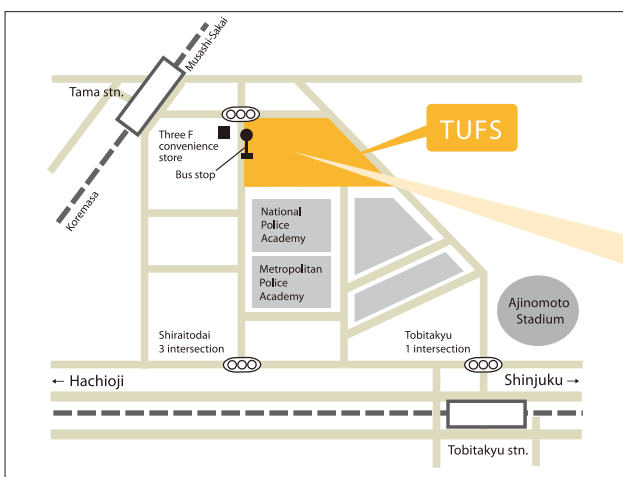


Since ILCAA is situated away from both Narita and Haneda International Airports and there are no trains connecting the airports to the station close to ILCAA we recommend that you take an airport limousine bus from the airports to “CHOFU Station”, and then take a taxi.

■ To reach ILCAA directly, take a limousine bus to “CHOFU Station” (app. 2hrs from Narita and 1.5hrs from Haneda). then take a taxi to TUFS (15min). 8 services are available daily from/to Narita, and 20 services from/to Haneda.

■ If you are staying around the JR “Chuo-sen” (“Chuo-line”) stations “MUSASHI-SAKAI” or “MITAKA”, take a limousine bus to “KICHIJOJI Station” (app. 2hrs from Narita and 1.5hrs from Haneda). then take a taxi to the hotel (10-15min). 12 services are available daily from/to Narita, and 18 services from/to Haneda.

For details and other options to come to ILCAA, see: <http://www.aa.tufs.ac.jp/en/about/access>



A Guide to Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) 2014

ILCAA Guide Publication Team 16 JUN 2014

Copyright © 2014 by Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) All Rights Reserved



東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa